川柳雑誌

麻生路郎★主宰

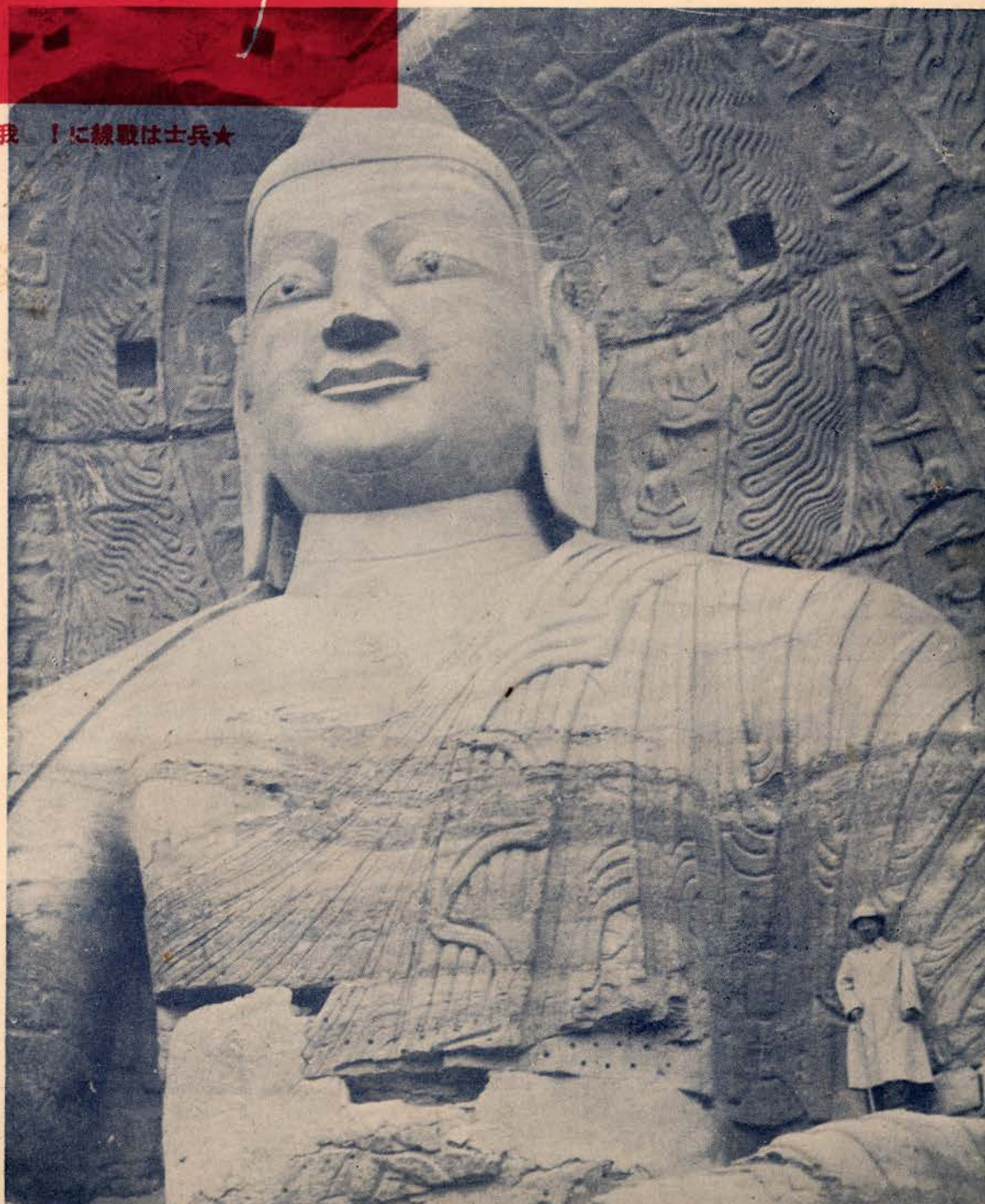
最高權威の月刊柳誌

人生勉強の標識燈

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十四年四月十五日發行　第十六卷第四號（毎月一回十五日發行）

★兵士は戰線に！　我等は銃後に!!（國民精神總動員）



183

第十六卷　第四號

毎月十五日發行

14/4

川柳雜誌 四月の會

技を磨くに好適のシーズン先進後進の別なく來會されたし

20日 夜6時半 (木)

★會場 誓得寺 (電話南四八八六) 市電清水町電停二丁北ノ辻西入

★兼題 「長女」(三句)……麻生路郎選
「作業服」(三句)……橋本綠雨選

★柳話 ……麻生路郎先生

★會費 三〇錢 (川協章提示の方は二五錢)

★呈賞 天位 (各題) に粗品を贈る

幹事・潮花・豆秋・呑水・紫香・水客・里十九・斗風

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六(昭和ビル)
川柳雜誌社
電土佐堀三三三三三・八一六三・八一六四番

松坂倶樂部三周年記念川柳大會

松坂倶樂部が創立三周年になりますので、四月二十日から二十四日迄松坂倶樂部綜合展覽會を開催することになりました。就きましてはその會期中に左記に據り記念川柳大會を開催いたします。どなたでもお越し下さい。

★時日 四月廿三日(日)午前十時——午後三時

★場所 大阪日本橋筋三丁目 松坂屋百貨店 中八階 菊の間

★兼題 「商品券」二句……麻生路郎先生選
「マネキン」二句……長崎柳秀先生選

★會費 金三〇錢

★呈賞 各題天地人に粗賞を呈し、なほ出席者を松、藤、柳の三組に分ち優勝の組に團體賞を呈す。

幹事 美根子・耕二・白面人・孤蓬
三華・くもを・生々庵・尙志

麻生路郎川柳講座

★戰線へ銃後へ笑爆へ快る送を著！

本書は本誌に連載され名評釋として好評嘖々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕妙さは日本柳壇に於ける著者の獨壇場である敢て薦む！

麻生路郎著

新川柳評釋

★定價十八錢 送料六錢

★四六版上質紙フランス製一〇四頁

鮮朝・滿洲・臺灣・太樺 錢八十八地外他のそ

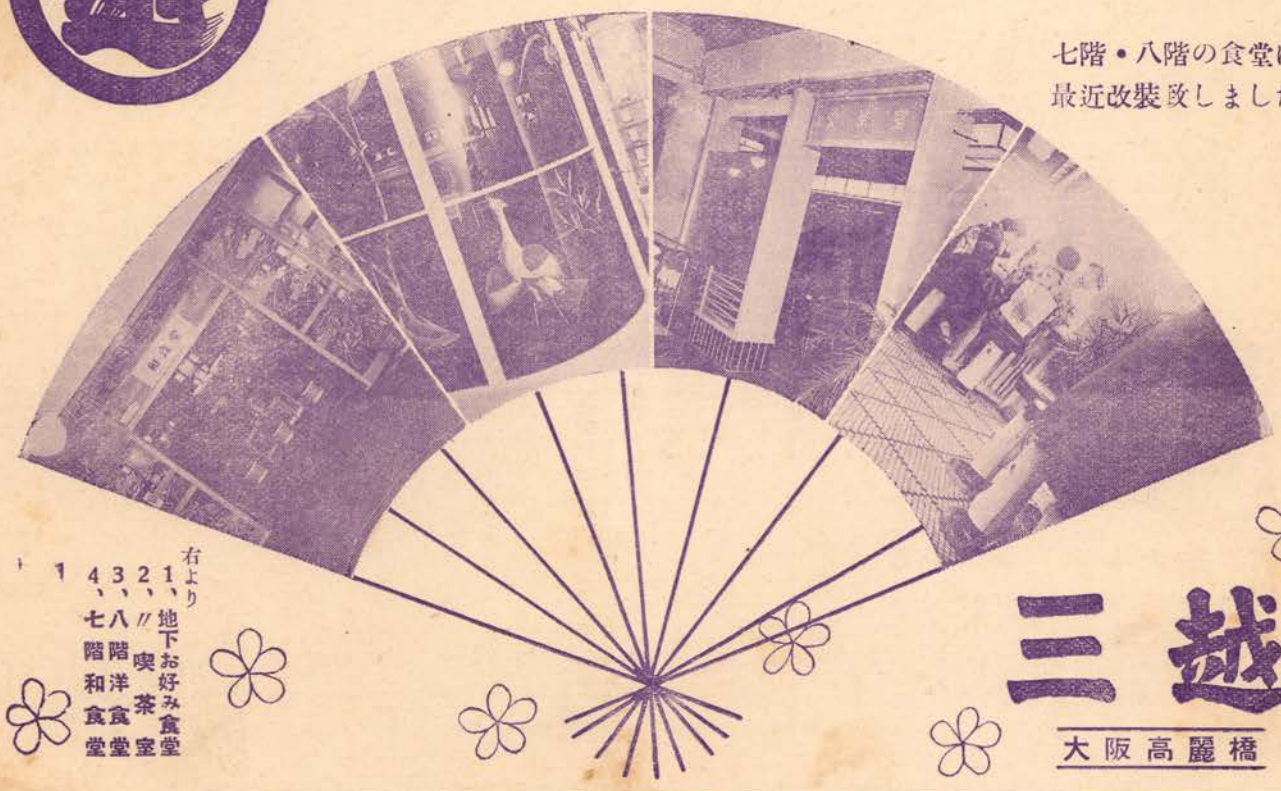
發行所 大阪市西出島町一五三番地 洞朽不

振替大阪三〇三九二番

上品でおいしい

大阪三越の食堂四景

七階・八階の食堂は最近改裝致しました



右より
1、地下お好み食堂
2、〃 奥茶室
3、八階洋食堂
4、七階和食堂

三越
大阪高麗橋

抗日畫家に與ふ

いとも莫迦々々しき畫を眺めつゝ

羅司斯君。

君は素晴らしい漫畫を描いて、抗日援蔣の夢を實現させやうとしてゐるが、僕は思ふ天下にこれ以上の愚擧はないと。僕はここに轉載してオール日本に紹介の勞をとることにした。おそらく君にとつては光榮でもあり、迷惑でもあらうが、日本人の血が沸ぎつてゐる僕としては默過し得ないのだ。

羅司斯君。

僕は曾て君を知らないし、君も又僕を知らないだらう。しかも僕は君に對して禿筆を苛する所以のものは君の愚擧が、單に君の同胞を欺くばかりでなく東亞の平和招來を寸秒たりとも遲延せしむるとすれば、その罪けだし死に値するものでないかを憂ふるものだ。

羅司斯君。

日本は今、東亞の建設を目指して膺懲の帥をすゝめてゐるのだ。その勢ひは決河であり、破竹でゝもあるのだ。從つて君の曲筆で以て、億兆分の一だも支へることは不可能だ。と、僕は斷言する。

羅司斯君。

君の迷畫によるデマを知つた我等日本人は僅に噴飯を以て酬ひるだらうし、戰の勇士は呵々大笑するに過ぎないだらう。君に示すに次の川柳を以てしたい。一讀玩味せよ。蓋し「我敵壯丁比較」の虚報が忽ちにして顔色を失ふだらう。

敗殘兵ねずみの逃ぐる姿なり　美知夫

輕機關敵も野草も薙ぎ倒し　宵明

我がものになつた城壁から旭　同

どうだ、どうだと云ひたい位なものだ。

武者ぶるいして戰線は明けかかり　美知夫

激戰をけろり忘れてシヤツ洗ふ　宵明

日本の兵隊の勇敢さと、餘裕綽々とした點はこれ等の句でも知れやう。

しかし、日本の兵隊は強いばかりではない。血もあり、涙もあるのだ。それは

敵の死へ花一輪を手向けて來　千彈

の句が實証してゐる筈だ。

支那馬の目に抗日の色はなし　美知夫

といふ句を讀んだならば盲目的な君達抗日分子は馬にさへ劣ると云はなければなるまい

右に揭げたのは何れも戰線を馳騁した勇士の句だ。しかも感情をそのまゝに流露した句だ。君描くところの漫畫の如く鷺を烏、イヤ烏を鷺だと曲筆するやうな、そんなしみつたれた根性とは、いささか類を異にしてゐるのだ。

羅司斯君。

おそらく君にしたつて、グン〳〵追ひつめられてゐる蔣の末路を見て「我壯丁上陣勇敢直前殺個痛快」なんて本氣では云へないだらう。

羅司君。

君はどう思うか知らんが、日本人は第三國を賴みとしない生一本の國民だよ。

日本刀純國産の味て切れ　白外郎

この句に示す通りだ。人類の敵を斃すのには何んの遠慮も會釋もしないのが正眞正銘の日本精神なんだ。君もマゴ〳〵してゐるといつ何ン時、純國産のお見舞をうけるか判つたもんぢやないよ。

階級の順で支那兵逃げてゆき　紫香

こんな句に接した時、君はその單刀直入的寫實に、頭が下らないかね。その點、逸早く自覺して更生を圖る臨時政府や維新政府の人々は賢明だよ

羅司斯君。

君は皇軍の宣撫班が如何に活躍しつゝあるかを目擊したことがあるかね。我等は銃後にあつても、彼等の心を心として、一片の忠告を君に送ることを忘れないのだ。

「抗日亡國親日興國」の大文字が貴國の到る處の壁上を飾つてゐる今日眞に生きんがため何を爲すべき乎を三思三考せよ。（J・A）

我敵壯丁比較　羅司斯作

敵壯丁故意使已發發避免出征

我國壯丁踴躍應徵入伍訓練

敵國軍人家屬難捨難離

我國壯丁家屬歡送壯丁受訓練

敵國軍人出征途上思人家心切

我國壯丁訓練時練之神彩奕奕

敵國軍人臨陣退縮

我壯丁上陣勇敢直前殺個痛快

＝（この畫は支那の雜誌から轉載したものです）＝

編輯局

川柳雜誌　四月號　目次

表紙寫眞……（大同・石佛）……岩崎柳路

包頭と蒙古人　麻生路郎（八）

抗日畫家に與ふ……（一）

姑娘……岩本素人……（三）

詩人　**子をとろ子とろ**……高鷲亞鈍……（六）

複眼

春の大島……寺井鋭々……（八）

武玉川三篇研究（二八）　梅本秋の屋　森東魚（四）　蛭子省二

東京だより……銀座鳥……（一〇）

近作柳樽……麻生路郎選……（一一）

川柳塔……諸家……（一二）

一路集……高須啞三味選……（一六）

櫻……渡邊曉童選……（一六）

各地柳壇……（一三）

後記（表三）……社關係の人々……（表三）

柳界展望……（一〇）

川・協……（一〇）

さらんぷ譚……（七）

さらんぷ譚（句）……麻生路郎

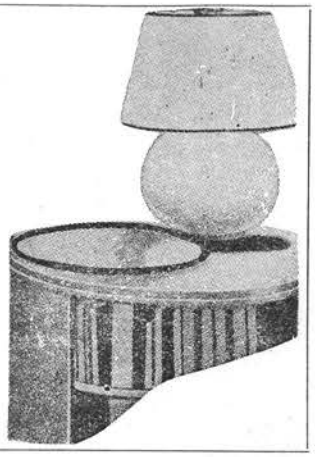
大坂形水

石井白面人……（七）

戸田孤蓬

麻生アート

「頬白先生」……寺井鋭々……（七）



川柳塔

路郎選

大陸へ二人連れなら行つてよし　大阪　橋本綠雨

丸髷が二人ついてる醉ひつぶれ

前借の月給妻も子供も居

轉業は銑盤工にもなれぬ也

立ち呑みが儲かるこゝを話して居　大阪　高橋かほる

散髪屋長柄の墓を尋ねられ

行樂の人に押されてゐる巡査

安治川へ石炭の船續くなり

手を叩く音新築の幼稚園

夜店まだ早く電氣屋上にゐる　横濱　福田山雨樓

三船九段の審判を拜見

一本の聲に錆ある青疊

月下氷人にまんまと落第

綠談にまで伏兵が待ち構え

うちつれて零下十度へまつしぐら　大阪　奥村丹路

全盛の頃の寫眞はみな揃ひ

八階の理髪部で見る空の青

一戸の主二坪ほどの庭に立ち

吊皮にひとゝき朝のわが姿

長女出産（二句）

泣いてゐる泣いてゐるなり生れた子

いまさらに頷くばかり母の恩　張家口　岩崎柳路

前線のこんなところに芋の蔓

カーテンの裏の動きに誰か居る

同情は子持の猫にもある娘

獻金と別に藝者の指環なり　兵庫縣　寺井鋭々

林檎汁飲む喉春の朝日受け

雨は雨でよろしと茶席庭を褒め

紙屑が流れても春のせゝらぎだ

鳩時計兒が留守中も鳴つて居り

○

制服に霰がおちて氣がまぎれ　兵庫縣　水谷鮎美

泥は水に似てはるかなる地平線

咳する子父の言葉を信じきり

髭のびたまゝ故郷からの客に會ひ　大阪　姫田夕鐘

母いよ〳〵小さくおはし達者なり

君に子規傳を借りたまゝなるに　名古屋　吉田水車

レヂスター小楯にとつて化粧する

商店法いきなりメニュウひつたくり

うつちやりのかたちで仲居運ぶなり

藝術寫眞大觀描く構圖にて　大阪　須崎豆秋

受驗生の目に大いなるグラウンド

お彼岸が雨で損する天王寺

アベノ橋

渡り初めすむと乞食が坐りこみ

春の雨、電話交換手と喧嘩

春風亂舞百圓札が飛ぶ

體位向上櫻の下で寫される　大阪　西いわを

巧言を弄して信じられずゐる

春の宵クリーム色に融合はん　大阪　後藤青兒

不寐番浮ぶ子の顔親の顔

卒業の訓辭身に泌む長期戰

掛聲に似て有難う有難う

蝙蝠は忘れてもよい合格日　南支　宮岡白峯

腕卷もほたるへ寄せて行く歩哨

日の丸も旭も背にある歩哨

戰爭に財けてアイウエも覺え

朝と晝晩も國歌の聲で征く

東京の話へ拍手續くなり

日の丸のサインは敗けた人も書き

神となる一歩手前の君偲ぶ

久し振り武運つたなき手を握り

背の子も派手に附けてる良民証

燒跡を褒めて貰ふた部隊長

水牛の後ろから來る人の影　大阪　中西おさむ

リュクサックおろせば頰を撫でる風

梅櫻春の埃のしたしまれ

花言葉少女の戀は夢を追ふ

女ふと女心をあざけりぬ　大阪　正本水客

安心の顔へ電氣がパッとつき

鯉幟旅に男の子を思ふ

なめられるにもこつがある三枚目

菜の花のなかへお寺の路つゞく

お住持は法事の終る聲になり　豊中　黒川紫香

玄關で戻るつもりの友を連れ

親籍があり屋根をさす高架線
シャッターがきしみデパート朝ミなり
蝶々へ先頭少し立ごまり

大阪　丸尾潮花

姉はまた悲しみ多き香を焚き
中之島戀のボートか蔭で浮き
ふた親を知らず四月のランドセル

大阪　大坂形水

幼な友噫乎忠魂の碑ミなれり
濱は夕凪タンタンタン舟歸る
子の落ちた音に心臓止つたり
醉ふてゐる帽子櫻の枝をさし

大阪　岩橋双虎

足る足らぬ暮らしミ別な所得税
冬の虹貴男を許す氣になつて
新芽ふく柳ミ僕ミだけの書

大阪　岡田某人

マンホール次々閉なのが覗き
街は春の陽ざしミ云ふにマンホール
退院をするミやつぱり吐鳴る父
風邪ひいてゐても一言居土は居土
客一人氣の毒なほごバスが搖れ
先頭に立つ日燒場へ急かるゝ日

十二貫支那へも行かず袖カバー
殊勳甲遺族を訪へば梅を生け

兵庫縣　田邊由布

着替へ出すしぐさも慣れた旅鞄
塵一つなくさびしくも夫婦きり
英靈へ坐る疊のへりが褪せ
北向に喰ふこんにやくへ母ミ坐し
南無卒堵婆ひなたに机並べてゐ

尼崎　酒井斗風

二十日ほご早い梅見に風邪を引き
帶の値に驚く窓の明るき灯
灯がついて春の日暮を知る讀書
櫻靜かに惱に答ふ

○

兵庫縣　長崎柳秀

灯がついてはつきり猪口の酒の色
蔣萬事休す日の丸支那に滿つ
夫婦ミは似たものかはり番に病み
道訊けばこゝらあたりの人でなし
赤ん坊へさうか〳〵ミ顏をよせ
新聞に日の丸があり街に旗
財産ミ云ふは死んでの保險金

大連　佐々木三福

凶か吉か土間に下ろした第一歩
聖戰の隅つこにゐても名譽
群盲の一人ミなつて目をつぶる
大嘘の後舌先の苦い味
動く音闇から朝へ引繼がれ
子の喧嘩生れた日まで言ふも母

今治　渡邊曉童

かほるさんミここのへんかいな島の内
迷ひ子の下駄の鼻緒がゆるんでる
秋風に人馬もろミもかゞやけり
諸車徐行右へ曲れば梅林

廣島　濱田久米雄

おでん屋で二錢の釣錢が納められ
鼠が捕れたなごゝ日曜日を起し
夜更かしをして來た証據服の泥
通勤へ妻を叱つた顏のまゝ
催促もせぬに集金だミにらみ
女事務サイレンにもう腰を上げ

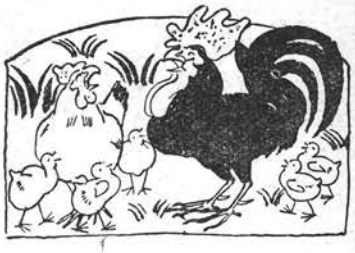
愛媛縣大洲　今川椋影

ホルモン劑人知れずこそ用ひしが
ごの顏もごの顏も滿ち足りた顏でなし
丸刈に時局認識の顏ミなり
人間の虚勢を犬も知つて居り

姑娘

素人生

クーニヤン、何となく親しみのある名前ぢやないか。クーニヤン、いゝねエ。あの太つたすし常のおつさん、俎板の隅のとこを拭巾で拭いて、そこに立つてゐる客の前へ器用な手付きで握つた奴を賊魚が二つはつが二つ次はこはだ……と胸算用をしながら置く、それを隣の客が「これ一つ貰ふで」と言ふが早いか頬張つてしまつた。「それたべたらどんならんが」おつさんがぼやく、胸の中は御破算だ。しかし手は少しも休まずにわさびの山を崩してゐる。奥の方の客が「おつさん酒や」「姑娘お銚子」常はんが表の方へ聲を掛ける。表は道だ。のれんの外道端のところでその姑娘なるものがお燗をしてゐる、和製のクーニヤンではあるが……以上は十年ももつと前の話。このおつさん漢口あたりで楊子江の意氣のいゝ奴を握つてゐたのかも知れんと思つた。次のはなしも其頃のはなしだ。言葉もよく解らないのに支那服なんかを着込んで上海の街を一人で——上海の街と言つても南京路とかバンドとか平凡なところではない——ぶら付いてゐると大道藝人がゐた女藝人だ。それも妙齢の謂ふ所の姑娘だ。一人の二十位の體格の好い姑娘が三尺程の高さの台の上へあを向きに寢て脚を直カクに空天へ伸ばしてゐる。頭とおいどに枕をしてゐる。その足の上に十六七のこれも姑娘が胡坐をかいてゐる。日本の輕業、達磨大師は坐禪のかたち……と言ふところ、だが、面白いのはこれからだ。その台が靜にグルリ〳〵と漫々的に廻る樣に出來てゐて、それの廻るにつれて、キョンチンテンミューケンルイラン…とか何とかゆるやかなメロデーが二人の姑娘の口から流れ出る。リヤンキュンメンタウンキン……この調子がそれらの空氣とピッタリ來て何とも言へない哀調を帶びてゐる。川柳雜誌がトーキーだつたら一つ聞かすのだが「リウロンキンマキユー」てな所をね、これは土地の俗謠であつて、文句はよく解らないが何となく懷しい調子の唄だ。台が回轉して唄が始ると觀衆があちらからもこちらからもホーホーとかピーキンランとか喊聲と言ふか彌次ると言ふか只もうワイ〳〵と言ひながら銅片を上の方の達磨姑娘の額を目掛けて投げつける。銅片は銅貨であるが、こゝではドンペーと讀んでほしい、そうでないと感じが出ない。姑娘は廻りながら唄ひながらたくみにその銅片の礫から額を外らす。一つも姑娘の顏へは中らない。それを又當てやうとして財布の空になるのも忘れて錢礫をキカン銃の——一寸大袈裟だが——投げる投げる守錢奴の樣に言はれる支那人にも斯ういふ一面があるからうれしい、この銅片の雨がつまり見料であつて。姑娘藝人の全收入なのである。何？　姑娘はシヤンか？　て？　無論、美しい可愛い姑娘だつた。と言ふ事にして置かう。（十四、三、十二）



武玉川三編研究

（二八）

梅本秋の東
森魚屋
蛭子省二

(509) **問屋の向ひ鸚鵡つたなし**

秋の屋＝この問屋といふのは、街道の問屋場のことで、日頃馬方や雲助等ばかり出入りするので、鸚鵡が拙ない言語の眞似をすると云ふのであらう。

東魚＝問屋場附近に道中を慰める鸚鵡などを飼つた茶店風のものでもあつたのか。どうも十分合點出來ぬ。本陣とか脇本陣とかいふ處とすれば、不自然ではない。

省二＝前二説で解釋は盡されて居るのではなからうか。

(510) **六十四州眠ル元旦**

秋の屋＝武士は年禮に出るけれども、他の農工商等は、元日は晝寢をしたのである。

東魚＝新春の長閑さを、大きくかう云つたのである。

省二＝天下泰平の御代の春だ。

(511) **鳥井か立ツて夜明新らし**

秋の屋＝黎明の頃の神社の光景は、眞にすが〳〵しく拜まれるが、新に白木の鳥居でも建つたならば、一層尊く拜まれるであらう。

東魚＝全く夜明の鳥居は神々しい。「新らし」の描寫には多少難があらうと思ふ。

省二＝鳥居から夜が明ける感じは、確かにある。

(512) **家内か立ツて見たる鮟鱇**

省二＝鮟鱇の吊切といひ食通の話柄となる。四五尺に及ぶ大なるものあり、家内達が立つての瞻とり〳〵。

秋の屋＝魚賣の持つてきた鮟鱇が巨大なので、家内一同が見に出たのである。

東魚＝引きたてた鮟鱇に、丈けをくらべる樣に、何に程大きいと家内のものが、代る代る見に出るのであらう。

(513) **陽炎の中に乞食の物狂ひ**

省二＝乞食の物狂が狂ひ歩るくあたり陽炎する。騷々しいやうであり、哀である。

秋の屋＝歌舞伎の所作事に有りさうな情景で、哀れといふよりも、陽氣なところが有る。

東魚＝麗な中に又一しほの哀れさがある。それが覗ひ處であらう。

(514) **盛上られて動くこんにやく**

秋の屋＝蒟蒻を煮て皿に盛つたのは、ぶる〳〵と動くやうにも見ゆる。

東魚＝面白い。何となく可笑味がある。据はり落ちつくまで實際かすかに動くのであらう。

省二＝心太がヒヨロ〳〵〳〵とかしこまる如くに、盛上げられた蒟蒻は興ある姿だ。落ちついても動いてゐるかに感ぜられる。

(515) **雷に落つく後家をあてこすり**

秋の屋＝孰れ若後家の一人住居であらう。

東魚＝雷に驚く後家なら、甘い色模樣とならないものでもないが、落付いてゐられては狂言もかけない仕儀であり、チト當の外づれたので、いや味を云ふのであらう。

省二＝あてこすり位平氣ならむ。雷にさへ驚かぬのだから。

(516) **むかし咄に庵の戸か明**

省二＝老友有り遠方より來る。

秋の屋＝友が來るのか歸るのか、少し不明瞭だと想ふ。

東魚＝垣外で昔の樣を咄などして憩ふ人のあるのを懷しく聞付けて、庵主が戸を開いて立出づると云ふ場合。

(517) **此ころの錢座つふれて松の風**

省二＝錢座興廢史はある。明和二年に興つて安永三年に廢されたりした。錢座がなくなつた後は、段々とさびれ行き、色々追回もわくであらう。松風が吹くとは推移の程が知られる。

秋の屋＝錢座では一時多數の職工を使用する故に、それが廢されると、急にその邊が寂しくなるのである。

東魚＝一時俗化した土地が、又元の自然の姿に還つたのを、「松の風」で表現したのであらう。

(518) **色に出て其行末は青あらし**

秋の屋＝戀といふものは、青嵐のふくやうに、一時は色にも出るが、時日が過ると跡に何も殘らぬとでも云ふ意歟。

東魚＝花が咲き花が散つて、軈ては青嵐の渡る青葉となると云ふのを、戀に事よせた如く云つたのかと思ふ。

省二＝「行末は青嵐」などは、全く俳諧的手法。綺麗であるが川柳家には刺戟がにぶい。

(519) **死んた女郎を譽る初雪**

秋の屋＝初雪の旦に往事を追想するのであらうが、其の理由は判然しない。

東魚＝死んでみると、今更に其人の美點が偲ばれる。女郎だけに、初雪に偶々思出したのである。

省二＝初雪の日に遊びに行つたのであらう。

(520) **都鳥若衆の舟は漕をくれ**

省二＝角田川舟遊び。遲れたのか若衆の舟で歟。

秋の屋＝藝者の舟だと俗であるが、若衆の舟だけに雅趣が有る。

東魚＝若衆を招いた客は女客であり、船頭も年配らしく思はれる。特に「漕をくれ」の説明にしては、味を損じるであらうが、その樣な連想が起る。

(521) **六月の日なたにぬかる長まくら**

省二＝六月の日向に長枕まで干したのは聊か爲損じ。

秋の屋＝六月の日向とは土用干の事で、他人の目に觸れない處に收藏して置いた、夫婦共用の長枕を、白晝に日向へ出して干したのは、少し失策であつたと云ふのである。

東魚＝可笑味がある。

(522) **醉ぬ鰹を草の戸の曠**

秋の屋＝草深い田家や山家へ來る鰹は、新鮮でなくて、それを食ふと醉ふのであるが、珍らしくも新鮮なのを求めて、而して身の曠れにすると云ふのである。

東魚＝主人公は道樂の果ての、若隱居であらう。

省二＝「鰹を買つて草の戸の曠」でよいのを、醉はぬと明らかにして居る。

(523) **本卦かえりも同し魂**

秋の屋＝三つ兒の魂百までといふ俗諺のある如く。六十一歳となつても、猶且、昔の意氣は失せぬと云ふのであらう。

東魚＝これを理屈ぽくとつてはいけない。洒落氣分に味ふべきである。

省二＝いくつになつても氣分は變らぬものでなくては世渡りは出來ぬ。

(524) **かたみの髪の見る度に減**

省二＝出したり入れたり、見る度びに取扱ふので少しつゝ減る。減る度びに淋しい。

秋の屋＝「かたみの髪」とは、情婦が切つて送つたものか、又は他郷で死んだ近親者の髪か、そこは不明である。

東　魚＝屢々見る。その度に減つてゐる氣がする。（事實減りもする）。そこに哀さが一層深い。

(525) **鹿を夢見て奈良に落着**

省　二＝いかにも樂しい旅だ。奈良といへば第一に鹿が頭に浮ぶ。

秋の屋＝奈良と鹿、餘りに陳腐のやうだ。

東　魚＝奈良と鹿は誠に陳腐だが、動物園のない時代、奈良へ來れば矢張り鹿を見る珍らしさを期待するに違ひない。

(526) **新地に道の殖る優婆塞**

東　魚＝新地が出來たので、又、祈禱などに廻る處が殖えたと云ふだけではないか。

省　二＝然り、新開地にお得意先が殖えたわけ。

秋の屋＝いかにも、新地といふと現今の二業地又は三業地といふやうな土地の事であらう。

(527) **栗の花ほうけて簑も草の音**

秋の屋＝「簑も草の音」は解釋が出來ぬ。

東　魚＝栗の花のほうけるのは晩夏であらうから、秋めく風に簑も草摺れのやうな音を立てるとでも云ふのか。

省　二＝お說通りならむか、暫く考ふ。

(528) **京には肌をぬいた佛閣**

省　二＝江戸時代は京都を惡しざまに言つて咎いと評した。だから、あの輪奐の美ある壯嚴な佛閣が多いのは、大に肌をぬいたものだらうと云ふのだ。

秋の屋＝前解の如くであらうが、佛閣には限らず神社も又同樣であらう。

東　魚＝佛閣には一肌ぬいだ京であると云ふ意を、云ひ廻した上、かく現はしたものと思ふ。

(529) **萬歲馴し婆々の挨拶**

省　二＝「萬歲を嫁は敬して遠ざける」で、萬歲にかゝつては婆さんでなくては應對は出來ぬ。顏馴染の萬歲であらう。

秋の屋＝「我れ見ても久しくなりぬ云々」といふ古歌の如く、幾十年かの馴染の萬歲と婆とであらう。

東　魚＝「萬歲馴れし」は奇拔である。

(530) **開帳の江戸に着日は初松魚**

秋の屋＝昔の神佛の開帳は、晩春より初夏の頃に掛けて、數多く行はれたやうである。

東　魚＝四月八日の釋尊の誕生日を當てゝ開帳にやつて來るのであらう。恰も初松魚の出る時である。

省　二＝江戸自慢の初松魚と賑やかな開帳とを材料にしたのが手柄の句。

(531) **役の行者の松明に醉ふ**

秋の屋＝人跡未踏の深山幽谷を跋渉するので、松明の煙にも醉ふ程であらう。役の行者の役の字を、普通には「えん」と發音するが、これは姓で「をゝせ」と訓み、名を小角といふのである。

東　魚＝役の行者が醉ふと云ふのか、役の行者の一行の凄じい松明に、見るものが醉ふと云ふのか、私は後解らしく思はれる。

省　二＝人跡未踏の深山を跋渉する程だから、松明は馴れきつて居るであらうと解すれば東魚さんのお說となるが、(664)「役の行者の立て居て喰ふ」と云ふ句から推考すると秋農屋さんのお說になる。

(532) **かまくらで寄る勘當の年**

省　二＝鎌倉ならよからう。稻毛などよりも。

秋の屋＝「勘當の年」が私には判らぬ。

東　魚＝勘當されて鎌倉に居る間に年が寄つた。鎌倉に勘當の年月を送つたとの意であらう。

(533) **けいせい買の內のなりふり**

省　二＝派手な傾城買も內では案外。

秋の屋＝傾城買に耽溺してゐる間の、派手姿ではない歟と私は考へる。どうも家內とは憶はれぬ。

東　魚＝內は自分の家の方の意と思ふ。內にゐてからが、いやにやつして、そは〳〵してゐると云ふのではないか。

省　二＝傾城買の糠味噌汁流かと思つた次第であつたが。

(534) **雙六の賭に夫の顏を見る**

秋の屋＝女房が傍觀して焦慮する體が判然と解る。

東　魚＝やつてゐるのが女房なのではないか。夫が傍觀してゐるので、これでよからうかと賭けたものゝ、流石女で危みながら、夫の顏をうかゝひみる場合の方かと思ふ。

省　二＝どちらにでも解し得と思ふ。前句を除いたもの故、主となる者が不明の句が、兎角多い。

(535) **黑燒でした戀も生死**

秋の屋＝眞黑焦げになつた熱烈の戀で、その結果は情死沙汰をも惹起するのである。

東　魚＝いもりの黑燒を用ひて、出來た戀だが、これとて生死のもつれがあると云ふのかと思ふ。

省　二＝黑燒を用ひた程の戀でも、生死別ありと云ふにあらざるか。

(536) **鉋屑ふく若い入相**

省　二＝大工が鉋屑をはき仕事仕舞をせんとして居るところへ入相の鐘が響く。

秋の屋＝「若い入相」は如何にも面白くない。

東　魚＝新に鐘樓が出來て、普請の鉋屑も片付けきらぬ位のうちに、既に入相の鐘を鳴らすと云ふのであらう。

武玉川研究（三月號）正誤表

頁	段	行	誤	正
四	一	九	左祖・	祖
四	二	二〇	深味を・	も
四	四	一三	歟・	（削る）

あらゆる趣味のお稽古場
手はごきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達
松坂倶樂部
會員募集
お稽古種目
長唄　常磐
清元　小鳥
小唄　物唄
箏　尺八
舞踊　能樂
小唄　長唄
ピアノ　聲樂
書道　茶道
華道　洋裁
俳句　川柳
氣功　棋道
學道　松坂レコード
道場　入所
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
七階松坂倶樂部へ
電話三〇〇三戎（表代）
松坂屋
大阪　日本橋

詩人眼複

(12)

高鷲亞鈍

子をとろ子とろ

辻角へ出るごとに春風を感じるやうになつた。市内へ移り住んで一年、最近漸やく長女の達子も風邪氣を拔けきつたかと思ふ。生れて間もなく肋膜で入院生活を送つたこの兒は病弱で、始終手にかゝるんであるが冬中咳をしたり、熱を出したり、その都度、小兒科の醫師の往診を受ける毎に、精神的に、物質的に父親の心膽をおぞ寒うせしめたのであるが、これから夏にむけて、又昨年のやうに、暑氣でひきつけを勃しはせんかと案じると今から情けない氣をして待つものゝやうである。

天下茶屋の總領息子の宅の近くで隱居してゐる祖父母はこの孫に目がなく、乙子で息子の僕などいまは眼中にない。それから結婚後、二十年近くなつても子種なく、最早諦めてしまつた兄貴夫婦は、この達子を眞當の兩親を差措いて、可愛がり、服やら靴やら、玩具やら、人形など、どん〳〵買ひ込んで娘の關心を得やうとする。全く油斷ならんのは兄貴たちであるが、時に、ええい面倒……と一層呉れてやらうと考へるが、しかし切角、俺とこに生れて來たものをと考へ直して、どうしても娘が手離せない。どうせ娘のことだし、大きくなれば嫁に出さねばならんのだから、上の兒は兄さんにあげたらどう、と姉達は言ふが、さういふ姉達の涼しさうな顏を見て、ちえつ、自分の子供じやないから言へたもんだと、こちらでは恬と受け付けないんである。

斯ふいふ樂目的になつてゐる達子故に、万一咳一つさすとか熱が三十九度でも突破したら、たとへ嘘でも智慧熱でも、天下茶屋に知れたらもう騒動で、祖母はタクシー飛ばして馳け込み、僕の女房把まへて、まづボロクソに叱るんである母親の注意が足らんからですよ、と。そして兄貴は兄貴で、相談もなく小兒科の醫者へ電話をかけ、僕の宅に往診に向けると、一方祖父は、信心してゐる玉水の金光教會へお參りに行くといつた具合だ。

あの兒は都會で育つ兒ぢやない。今年は郊外に家を移せといふ意見は耳鼻科のくせに、醫師といふ建前から出た義兄の提案で、それは俄然有力な聲となつて、一日僕は天下茶屋へ呼びつけられ、父母や兄貴夫婦が迫つてきたのには閉口だつた。僕達は昨年から二番目の姉が嫁いだ羅紗商店に入り込み、郊外に住む義兄達に代つて、店員の監督やら賄などして、僕も家内もそれ〴〵役目があつて、一寸郊外に轉宅するなどといふことは困難である。都會に子供が育たん事あるものか俺の兒が育たんものなら、都會に子供が一人も居ないといふことになる。これが僕の主張で、意地からでも郊外に移らないといふ氣勢を擧げると、おまへは子供が可愛くないのかと母が氣色ばんで詰め寄る。バカな親が子を可愛くないなんてことあるものですか。大體皆は僕の子供に對して餘り節介しすぎる。僕の子は僕ら夫婦で何んとかする。お母さんや兄さんは達子に親のあるのを忘れてしまつてゐる。と僕は始めて、胸に持つてゐたことをぶち撒くんである。よく言ふた。おまへの娘のことを心配してやるのも、つまりおまへの心配してやつてゐるといふ事を知らずに、さういふ効いた風なこと言ふなら勝手にしたら良からうと、父親は僕を睨みつけて言ふから勿論さうします。今後は子供の事は何も言はんで慾しい。と止めさして了ふと、瞬間ボカンとした空虛を感じて、その儘、僕は默つてしまつたのである。すると暫くして、兄貴がゲラ〳〵笑ひ出し、まあまあ誠一の氣持も解るがね、しかし其麼馬鹿なことを言つて怒るではないや、まあよく考へとくんだね、と言はれ僕もムキになつたことが可笑しく、その日は笑つて家に歸つたのである。

しかしそんな娘の事で親子兄弟で言ひ爭つたのも達子が惡かつた時のことで、段々季候も良くなり、露路で三輪車に乘つて遊ぶやうになつた近頃の小康狀態では親類の誰も何も言つて來ないし、祖父母は相變らず三日置き位に宿りがけで達子と遊びにやつて來ては、マ、ゴトの御客さんに坐つたり、「國を出てから幾月ぞ……」の軍歌や、唱歌を聽いて、元氣になつた〳〵と言つて喜こんで歸つてゆく。兄貴達は心齋橋に出ると不二屋から電話で達子を連れて來いと言つて僕達を呼び出し、何だかだと美味しいものをおごつて呉れるんである。近頃の兄貴は、かき舟や、料亭や、御茶屋から、凡そ出鱈目な所から電話して達子持參で僕を招んでくれるが、少しこれは難有迷惑である。

今年は一つ今から心がけて子供の日光浴、幼兒體操休日の日曜は郊外行を勵行して鍛へてゆきたいものだと思ふ。それも母親ばかりにまかせずに一つ、夫婦共同事業にしてやつてゆきたい。日曜日だと言つても僕は晝まで寢てしまうやうでは駄目だなと思つてゐる。

募集句

一路集

船

啞三味選

生きるため大海原に挑みかけ　比呂志
日本の力を見せて捕鯨船　鰐洞
遊覽船話題を乘せて春に著き　山尾
船世帶雨に烟を細く上げ　一龜
奉公に行く子初めて船に乘り　風葉
渡船牛の生れた話まで　瞳童
良い月へ一人動いたもやひ船　同
船急に停り身投げの噂たち　巨人
凉み船にもやはり蚊がゐる　同
マドロスパイプ船員にある誇　三錢
傳馬船今朝の寒さの霜を掃き　同
落伍者を渡船場で待つハイキング　同
霧晴へ船は破壞の前にゐる　芳泉
病院船窓から故國を懷かしみ　芳郎
默々と石炭船は曳かれてる　半休
入船の日へおしやべりが寄つて來る　同
マスコットの猫が鳴いてる船長室　みづほ
春霞ほつかり汽船浮び出で　同
タラップを登るセイラー唄になり　文庫
船からの便りに海の色のよさ　同
海峽の線一すぢを巨船行く　同
牡蠣船の灯も春らしい色になり　斗風
船の旅鯨にあつたことも書き　正柳
船體の白さへ旅情果しなし　同
我國の船だ國旗だ日の丸だ　同
(五)遠足の萬歲になる外國船　水客
(五)連絡船汽車で話した娘を想ひ　斗風
(五)流れ星見つけて船に醉うてゐる　風葉
(五)洋行を見送り船を觀て戻り　春巢
(五)船一つ冬の景色を寒くする　水客
(人)ボートの眼牡蠣船の灯へ笑ひかけ　風葉
(地)移民船はや大陸の夢を見る　みづほ
(天)運送船敵地が見えるまでの醉　芳郎

櫻

曉童選

滿開の櫻の中を渡る鐘　芳泉
押花の櫻が散つた慰問文　春巢
盃に櫻花一輪飛んで來る　山尾
征く妻櫻の前で撮つておき　半休
水盤の櫻の花が散つて浮き　一笑
夜櫻へさんだ粗相が緣となり　不水
櫻咲く故鄕が見せたい慰問文　芳郎
コ、ァーの香櫻も咲いてゐる　斗風
亞米利加で日本を咲かす櫻花　五柳
櫻さくら心のま、に散るものか　水客
櫻狩仕度の宵へ雨を聞き　一龜
亞米利加と知らず櫻は派手に咲き　鰐洞
滿開の櫻の元に傷病兵　夢女
花もよし葉もよし櫻酒にされ　文庫
滿開は王者の如く眺められ　同
逢ひに行く九段の櫻散りかゝる　巨人
空爆へ櫻一枝持つて行く　同
櫻にも遠く銃後の鍬をとり　みづほ
尼僧院こゝにも櫻春を告げ　同
サイタサイタサクラと習ふ子は元氣　風葉
教室を櫻の花が覗き込み　同
花便り聞く病床も馴れてゐる　三錢
夜櫻へ抑制出來ぬ若さで來　同

演藝・映畫に

とらんぷ譚（ものがたり）

原作・脚本・出演……サッシャ・ギトリイ
作曲……アドルフ・ボルシャール
演奏……コンセル・バドルー管絃團
日本版代辯……徳川夢聲
僕……サッシャ・ギトリイ
僕の少年時代……セルジュ・グラーヴ
僕の青年時代……ピエール・アッシイ
妻……ジャクリーヌ・ドリュバック

川柳を觀る

・物語・

僕の變轉極まりなき四十年の生活は僕が十三歳の時に發端する。僕は村の雜貨商の息子だつた。

或る日ビー玉を買ひたい一心で兩親の抽斗から八錢を盜んだ。この日晝食には茸の御馳走が出たが、僕の竊盜を看破した父親はカン〳〵に憤慨してかう叫んだ。

「盜人をするやうな奴には茸なんか食はさない！」

僕の一家は十二人の大家族が僕を除いて茸の御馳走に舌鼓を打つた。そして、僕を除いて一朝にして十一個の死體となり果てた。

「俺は盜みをしたから命があつたのだ。」

この意見が僕のその後の四十年の生活の上に、儼然たる支配力を發揮したのである。僕は貪慾で意地の悪い父親の從弟夫婦の許に引取られたが、遂にこゝから逃亡して先づレストランのボーイとなり、次いで、ホテルのボーイとなつた。僕はこゝで始めて「金持ち」と稱する人種を見て、何時かはあんな人間になつてみたいといふ願望が沸いて來た。

僕は十七の時、憧憬の巴里でレストランのボーイになつたのが一八九六年のこと、皿洗ひの青年と親しくなり、この男の不可思議な性格に強く惹きつけられた。僕はずる〳〵と彼が計畫する恐るべき犯罪の過中に捲込まれたが、僕の密告で彼等の一味は犯行の直前に一網打盡となつた。

僕は、その年の冬モナコへ出掛けて行つた。そこではエレベーター・ボーイの職を持つた、その頃、僕はつまり人生の春を知つたのである。……相手は僕より年上のボーシヤン・デュ・ブール・ド・カテイナックス伯爵夫人だつた。僕は彼女から記念の金時計を受取つた。

さうこうする中に僕は徴兵適齢に達し、三年間を兵營で送つた。除隊した僕は再びモナコへ着くとすぐ舊友に出會ひ、不正直ではあり得ない職業、即ち賭博臺取締になることを薦められた。一時間の後、僕はモナコへ歸化の手續きを取りかの傳統的な熊手を渡された。ところが一九一四年世界大戰は勃發した。フランス政府は僕のモナコ歸化を認めず、僕は銃をとつて戰線に向つたが、負傷して後送された。この時僕を舁いで來て呉れたシヤルボニエといふ男、彼も間もなく重傷を負つた。

僕は傷の癒るまで病院生活中色々の本を讀み、今迄に想像だにしなかつた世界の種々相を學んだ。

僕はホテルで天使の如き一人の女性と相識つた。しかし彼女は寶石泥棒で、僕は危く共犯者となることを知り、大膽にも或は卑怯にも彼女を置去りにして逃れた。そして間もなくモナコに行き、クルーピエに復職したその頃僕は「妻」に逢つたのである。

彼女は僕の受持ちの第四テーブルに席をとつて僕の心を射るやうな視線を投げたのである。しかも僕は彼女の不思議な力に支配されるかの樣に思ひの儘の穴へ玉を入れることが出來た。僕はこの見知らぬ女に毎日莫大な金額を獲さして置くことがたまらなくなり、或る夜彼女と近附きになり、二人で組んで利益を分配するために形式的な結婚をすることにした。

作戰と準備の新婚旅行を終へカヂノへ出掛けたが我々の儲けはおろか、僕は胴元を破產させて馘になつた。我々は離婚した僕はカードの使ひ分けから、變裝の奥義を極め、本職のペテン師となり巨萬の金を得た。或る夜、さるカヂノで例の女賊と、僕の名目だけの妻が一緒にゐるではないか。變裝した僕は僕だと氣付かれることなく彼等を夕飯に招き、末知のものであつた嘗ての妻の情夫となつた。其後例に依つていかさまのカードを袖口に潜めて賭博臺に向つたところが僕がペテンにかけやうとしてゐる相手が、僕を戰場から救ひ出して呉れたシヤルボニエではないか。僕が即座に賭けを放棄したので不審さうに彼は席を立つて僕の傍へやつて來た。

僕はシヤルボニエ君ではないかと云つた。戰友は懐かしさうに彼の唯一の左手を差延べた。そして十分の後二人は組んで賭け僕は、本當の賭博ファンになつてしまつた。そして廿年間に儲けた巨萬の富を數ヶ月で失ひ今は牢獄へ行く危險を味はずに濟む唯一の職業探偵となり果てたのである。

――とらんぷ譚（ものがたり）――

麻生路郎

★

嬶て悲劇となるとも知らぬ毒茸よ
幸か不幸か十一對一のひとりぼち
グレシヤムの法則ひとり生きのこり
轉々として惡の手助け性は善
ボーイボーイ人生の春敎へられ
金時計若い燕の手に遺り
カウンテス夢は男の數となり
籠拔けのダイヤも同じ光りやう
變裝で女を莫迦にした誇り
正直が首を擡げて負け續け
氣の弱りもう純眞へ双向へず

★

大坂形水

むしろお可笑みに十一、棺が出る
「僕」の見し神は即ちルーレット
鮮やかなペン動きつゝFIN

★

石井白面人

葬式に泣かずに居たを記憶する
親類で育ちどこかぐひがんで居
死ぬ一歩手前復讐思ひ立ち
露見してゐる秘密と知らずまだ凝議
近づいて來たは一物ある女
味はつてみたいスリルに怖はくなり
籠拔けの伴奏もするポータブル
モナコモナコ堅氣で居るは馬鹿のやう
いかさまへ相手あんまり弱すぎる
慾出してから食ひ違ふルーレット
賭事へ女大膽不敵なり
別莊があつさりと建つハートの九
宿命を信じ宿命どほり生き
誘惑をした思ひ出がまだ殘り
絶緣てから逢へば女はなほ若い
耳だけを忘れ變裝出來上り
無一文になつて人生わかりかけ

★

戸田孤鋒

村中の悔みに「僕」はこはくなり
闇の華しなび巴里の朝は雪
良心と云ふ邪魔者を棄てかねて
路すべてカジノへ續く蒼い海
ポータブルおやゝ次は穿孔機
惡の華すてつちまつてきく雲雀
探偵になれば綠なき牢獄か

★

麻生アート

盜癖をとがめた父の柩行く
エレヴェーターの客を待たせて「僕」の戀
共犯を怖れ女を捨てゝ逃げ
愚人と知つて賭博の座をはづし

映畫「頰白先生」を觀て

寺井鋭々

○梅田映畫劇場へ入つて見る此頃餘り映畫なども觀に行かずに居たが、來て見ると觀客は滿員の盛況である。

○劇は古川綠波主演の「頰白先生。」内田百間氏の原作で、冬の淋しい日の光の中に、春の芽ぐみの風を感ずるやうな、何かこう氣持の好い情趣が滲み出てゐて、思ひの外の好畫である。

○冬の雜木林の道、默々と歸り行く靑路先生の、淋しさの中に朗らかさを持つた姿。妻と性格相違の爲め、家を出て孤獨な間借生活中にも、小鳥と一面の琴を愛する、恬淡と有情の靑路先生の態度。大學敎授を辭し、其の退職手當を以て、高利貸に借金を返濟し、一切の心の雲を打拂ひ、親友たる杉原勾當と川端龍介の兩盲人の彈琴に聽入り悟達の境に身も心も任せる靑路先生の心情。之等を現はすに綠波の演技も、又脚色、演出、撮影にも相當に心が用ひられてゐて、しつとりと濕ひのある、香高き文藝映畫である。

東寶近來の傑作と思ふ。

抱へ行く時計が鳴つた落葉道　間借りしてゐた頰白の籠を置き　同

銳々

Sata Special Klinik

呼吸器病科
診療　毎午日前
醫學博士 佐多愛彦　電北38
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎　電話納1151

内科

市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
天王寺堂島北町　電北八二八四

(52)寺内部隊の軍樂隊・岡田部隊長と路郎主幹

包頭と蒙古人

北支蒙疆の印象(Ⅵ)

麻生路郎　寫眞　岩崎柳路

十月十日の午後、厚和站から包頭に向つた。

包頭は京包線の終點で北京を去る西北に八百十七キロの處にある。厚和から汽車で四時間かゝる。蒙疆で、汽車で到達する事の出來る最北の地である。土地は沙漠質で、所々、雜草が粗生して居る。事變前までは包頭縣と稱して居たさうだが、蒙古聯盟が成立して厚和と共に特別市に改められた。街は南面して山に寄り、背後の山の腰部から平地にかけて周圍十六支里半、馬蹄形の城壁にかこまれ、人口は城内八萬、城外四萬と云はれて居る。事變前まで誰一人居なかつた此包頭に、邦人が六百名から活動して居ると聞かされた。既に在鄉軍人會、居留民會、國防婦人會などが出來て居た。國婦の會員は藝妓、女給、女將などで組織され、部隊慰問に力を盡してゐる。國防最前線でそれらの美しい人達の慰問は、時ならぬ時に櫻が咲いたやうな喜びを與へるであらう。

☆

柳路君と私は城内の包頭ホテルにトランクを送り込むと、直ぐ洋車で驛の南方の黃河の沿岸に出た。久し振りに水を見た喜びを感じた。夕暮が迫つて風は寒かつたが、落日の美觀は筆紙に盡し難い。向ふ岸は見えないが、渡船がある。河の水が途中で、幾度か逆流して居るのは奇觀である。岸の畔に暫く佇立して居たが、此處らも危險地帶なので、再び洋車で引返した。途中、人の住んで居ない土壁で圍まれた屋根の上に、皇軍の哨兵が突立つて居るのを見た。車上から遙かに敬意を表すると應答があつた。心からなる感謝の念が湧く。

城内に戻つた。支那家屋の壁に、一字が二間位の大きさの文字で「抗日亡國」の文字が讀まれた。大江橋の北詰の壁面に「飲酒亡國禁酒興國」とあるのが想起された。

☆

包頭ホテルも支那家屋の改造で、幾つかの家を繼ぎたしたやうで、可なりの廣さと、可なりの部屋數を持つてゐる。風呂へ這入るにしても、用便をするにしても、戸外へ出て露路を歩き廻つてゐる感じがする。風呂は泥鰌を放してある生洲だと思へば大した違ひはない。水が悪いので石鹼がきしんで泡立たない。そこ〳〵にして部屋に戻つた。

夕食の膳には、鮒の刺身が食慾をそゝつた。黃河の鮒である。生洲に入れて一週間位泥を吐かすのださうだ。歸化城の月の家ではライのあらひに舌鼓をうつたが、これも黃河で漁れたものである。

翌十一日の朝、私は駱駝に乘つた。駱駝がすつくと立ち上つた時には、馬に乘つたよりも遙かに背が高いだけに、お伽の國の王樣になつたやうな氣持がした。たしかに、此駱駝は私の童心をゆさぶつた。

☆

此處の支那劇場でも、岡田部隊長指揮の軍樂を拜聽した。奏樂に先立つて、諸種の木管樂器を一々紹介された事は一般聽衆の興味を誘つた。此處の聽衆も軍人を主體に、居留民や漢人、蒙人などで、慰問と宣撫を兼ねたものである。私達は此處でも愛國行進曲を合唱した。

演奏が終つてから、包頭公園へ出駈けた。公園の一隅に一輪重兵の碑が建つてゐる。秋の色んな花が捧げられてゐる。公園から引返へして繁華街を拔け城外の龍泉寺を訪ねた。寺の奥深く這入つたが誰も出て來ない。小さな位碑に貼紙がして小濱大佐外二十九勇士の靈と記され、其前に果物の僅かが供へられて居た。東亞建設の大きな犧牲として異鄉に眠る人達のため冥福を祈つた城門外へ出る事はまだ危險であるからと注意されてゐたので、三十分ばかりで引返へした。

(53)蒙古人を訪ねた路郎主幹

包(蒙古人の住居)を見たいと思つて色々聞いて見たが、まだ

【雜筆】

春の大島

寺井鋭々

◇

○伊豆の下田港から、正午、春は船に乘つて……と大島へ向ふ。三月の彼岸、世はまだ料峭な春寒ながら、流石南國の風は餘程春めいてゐる。

○午後二時過、大島の岡田港へ着くと、此の船を目がけて、澤山の乘客が、乘船場へヒシ〳〵と押寄せて來る。聞けば今日のやうな祭日や日曜には、東京を前夜出帆して早朝來島、觀光の上即日歸京の人達が、四五千人はあるといふ。三原山の有名さの魅力の大なるに今更驚いた。

○大島の土地を一歩踏むと、もう眞紅の椿の花が此處彼處に咲き、艶々しい黑い髮を、無造作に束ね、其れに紺のソウメン絞りや、白地の手拭を卷付け頭で、紺絣の筒袖の着物に細帶のアンコ(島の娘女)の姿が隨所に見られる。

○大島の女はすべて物を頭に載せて運ぶ。米俵一俵を載せる。最大重量四十貫を載せた女もあるといふ話。島の女は娘時代から、農事や漁業や、又水汲、薪刈に孜々としてよく働くが、其健康美と丈なす黑髮とは相反映して、頼母しい風格を見せてゐる。

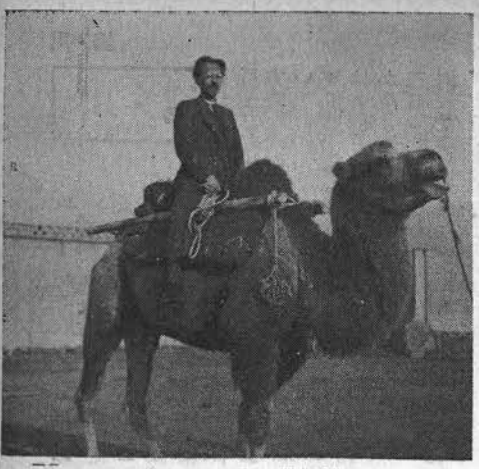
○「わたしや大島御神火そだち胸に煙は絶えはせぬ」の大島節も、薪を刈つたり、椿の實を干したり、水を運んだりしつゝ、アンコ達の唄ふ節は、寧ろ哀調を帶びた情趣を漂はしてゐる。

○道の兩側にトンネルをなす椿の街道を通り、泉津村の動物公園へ行く。島の東北岸の泉津村から行者窟に至る廣袤四十餘萬坪の大林園境である。皮を被つた生のまゝの落花生豆の餌を持つて入園する。鶴、雉子、孔雀、ほろ〳〵鳥、七面鳥、駝鳥鹿、猿、山羊、猪等々を自然の放飼ひにしてある。觀覽者が入つて行くと、動物の方からそれ〳〵人の方へ寄つて來る。落花生豆を拋つてやると、皮の儘皆爭つて食べる。猿だけは皮を剝いて食べる。人間が來るのは餌を與れるものとしてよく知つてゐる。習慣はえらいものだと感

御結婚其他記念品の御下命は

★

是非弊店を御利用願ひます



(54) 黄河の落日

(55) 觀泉寺に於ける路部主幹

(56) 包頭站に於ける國防婦人

(57) 包頭の駱駝と路部主幹

五十里も奥へ這入らぬと見られぬと聞かされたので、斷念した。五十里はおろか一里も外へ出られないのだ。然し共匪の難を避けて、蒙古人が支那家屋に住んでゐると聞かされたので、蒙古人を訪問する事にした。洋車で訪ね廻つた揚句、一蒙古人の居所を突きとめ、ドアを排しておとづれた。

大人らしい老人が毛皮の敷物を二尺位の高さの床に敷いて、其上へ私を招じた。互に相對して、さて口をきかうとしたが、私は蒙古語の一語も話し得ないので、ハツとした。お互に好感を持ちながら、一語すら交へる事が出來ないのは甚だ遺憾であつた。握手と瞳と瞳の好意の交換で辭するより他に方法がなかつた。

蒙古人は日本人によく似てゐると聞かされてゐたがこれほどよく似てゐるとは思はなかつた。義經が蒙古へ落ちたといふ說を信じないまでも日本とは古い脈絡がありさうな氣がするほどによく似てゐた。

☆

包頭の城外へ出ると、多數の駱駝が眼に映る。北行すればゴビの沙漠へ續く。ゴビの沙漠といへば個有名詞と思つてゐたがゴビはある種の砂を云ふので、普通名詞だと云ふ事がわかつた。馬鹿々々しい話ではあるが、學校の先生などもおそらく、個有名詞だと思ひ込むで教へてゐられるらしい。

☆

いよ〳〵包頭を最後として引返へす事となつた。包頭、北京間の列車に乘らうとすれば、一日一回しか出ないので明日の朝まで待たねばならぬ。翌朝の汽車に乘る爲に、此處へ一泊するよりは、厚和へ引返へす事にした。それで急に午後の厚和行の汽車に乘つた。此の列車は三等しかない。漢人等の多數勞働者を滿載してゐるので、異樣な臭氣が鼻を衝く。邦人は殆ど乘つて居ない。私達の客車では私と柳路君と二人きゝだつた。

☆

トーチカの中に居て鐵橋を護る兵隊さんのこと、蒙古聯盟の利守信と同車したこと、車中で福田眉仙畫伯が從軍畫家の腕章をつけ老軀を揚げて活躍されてゐたのに出遇つたことなど、書けば際限なく書きたいことがあるが、北支蒙疆の印象は一ト先づこの邊で切ることにした。

附言。軍の行動、その他書くことを許されないものは書かなかつたが、書いたものには少しの嘘もないことを特にことわつて置く。

心する。

○三原山の火口へ立つ。火口内を覗き込める好地點は、柵を設け觀覽料を取つてゐる。金十錢と十五錢との二箇所がある。一は噴火の音響を聽かせる擴聲機を備へてゐるが、レシバーを耳に當てゝ見たが、機械が不完全なのか、いゝ加減の物なのか判然と聽こえない。他は大きな圓鏡を二面、反射鏡的に組立て二千尺の深さの火口底を見せるやうにしてある。小石に紙の長片を附けたものを、斷崖に投げ込んで、その落下して行く樣を此鏡に反映させる。之は一寸思付である。

併しこんな原始的な處にも、遊覽地となれば、金儲けには拔目はないと思はれた。

○波浮港は火口湖の一方が、海に通じたものと謂はれてゐる。直徑三五〇米の小灣港である。灣内の水深は迚も深いが、灣口が頗る淺い爲め、大船は入港出來ない。

「波浮の港は夕燒小燒」と歌謠で有名になつてゐるが、大した感興のない所である。漁船の船夫にでもなれば、纒綿たる情緒を味はふべき、唯一の港街かも知れないが。

○大島は水が非常に不足な土地である。岡田村だけは水源池があつて、水道が敷かれてあるが、其他の土地は全島殆んど水不足である。井戸を掘つても水が出ない。それで雨の水を屋根から戸樋で流して、之を溜めて置いて、使用するといふ。温泉なども少しも湧出してゐない。之はつまり全島が噴火の際に地脈が亂雜となつて、連繫を保つてゐない爲めだと觀測されてゐる。

○三原山の頂からは、乳白色の御神火の煙が、絶えず大空にゆるやかに立昇つてゐる。其のなだらかな山裾の樹林には、椿の樹が充滿して、今二番花が常綠の葉の中に、點々と紅く染出されてゐる。雜木林の中では、鶯、眼白、鶸、山雀などが朗らかに、春の譜を奏してゐる。沈丁花の甘い匂の漂ふ邊りの牧牛場では、紺絣のアンコが牛乳を搾つてゐる。油繪のやうな長閑な、島の田園風景である。

伊豆大島雜吟

孫のある人も來てゐる三原山　銳々
大島の夢は椿の中でも寢　同
椿ぼた〳〵アンコは桶をのせて　同
行き

協・川

★オール愛媛川柳大會

第二回オール愛媛川柳大會が來る廿三日午前十時(日)松山附近で開催される由詳細は松山市南柳井町五九矢野方愛媛川柳社へ問合はされたい。

▼既報、松坂倶樂部綜合展覽會は會期更に變更、來る四月廿日から廿四日迄五日間と決定、廿三日の松坂倶樂部三周年記念川柳大會は既報通り廿三日午前十時から三時迄である。一般川柳人の參加を切望するとのこと。

★西日本鐵道川柳大會

本協會後援の西日本鐵道川柳大會は過ぐる三月廿五日午后六時に尾道驛前松風館に於て開會され各地より祝電祝辭あり、頗ぶる盛會であつた。

★ふ社十周年川柳大會

ふあうすと社(神戸)では來る五月十四日正午、神戸湊川公園市立勸業館三館大廣間に於て十周年記念川柳大會を開催すると兼題「笑顔」「十年」「時局」「女の眼」「藝」「愛國心」「信用」以上七題各二句宛(兼題は當日持參)、會費五十錢。

▼北京川柳會は三月十三日默然人居ナニワホテルで、珍客松尾君を圍んで青龍刀、大八、笑鬼雨明君等が小集を開かれた。

▼川柳研究社(東京)では二日神戸の一狂君を迎へる會を開かれた。

▼南柳會(大阪)は三月十七日大阪同志社倶樂部で相撲川柳大會を開催後、南柳會を解散した。

▼宮尾しげを君(東京)はコドモ漫畫名作物語「孫悟空」を刊行された。定價一圓内地送料は拾錢。

▼和田天民子君(東京)は昭和十三年度俳詩特選集を東京市中野區氷川町二〇昭文館から刊行された。定價壹圓貳拾錢。

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一寸手一投足を此欄望調ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する。(孫)

催

▼三月五日十九日午後一時、松坂倶樂部川柳講座▼十三日廿三日夜、親友會(尾崎)句會▼十四日二十八日夜、有恒川柳會▼廿四日夜、阪大川柳會▼廿五日西日本鐵道川柳大會(尾道)以上何れも路郎師出席▼十八日夜、川柳雜誌社三月例會を誓得寺に開催路郎師病欠席のため岩本素人君柳話▼六日夜、昭和川柳社三月例會

▼川柳雜誌社は二日阪急中山寺より同奥の院を經て、淸荒神へ吟行。雨中傘をさして立ちながら作句をした。

▼このみ川柳會は一日夕刻中道八阪神社にて例會路郎師出席柳話。

消息

▼岩崎柳路君(張家口)は一月廿九日に川雜蒙疆支部の第四回句會を開催長谷川福壽草、高杉北扇、難波漫躊郎、寺尾史人、福田福柳、神戸幽鳳、宇敷桃水、池上淸水、小川靜觀堂、岩崎松代、岩崎柳路君等の十一名が參集された由、なほ二月五日夕から第五回の句會を開催、出席者は池田新朗(北京川柳會)、寺尾史人、長谷川福壽草、宇敷桃水、小川靜觀堂、池上淸水、難波漫躊郎、岩崎松代、岩崎柳路君の九名だつたとのこと。

▼原史風君(不朽洞會員)は「團服と見よ東海に今日も暮れ」の句を寄せられたところを見ると相變らず公私多忙らしい。

▼橋本綠雨君(不朽洞會員)は四ツ橋川柳會の肝煎役として「よつばし」の三號(非賣品)を出された。

▼酒井大樓君(松山)は三月十七日川雜廣島支部の句會に出席された。同席の柳友は久米雄、秋史、紫浪、麥作、いさを、天國、草雲子、須彌浩、松岳、かなめの諸君であつた。

▼大森千代香君(岡山)は岡山陸軍病院で療養中であるが、盛んに同好の友を作つて精進をつゞけてゐられる。

▼濱田久米雄君(廣島)は退院近き千代香君を自宅に招じ、麥作君、紫浪君等と晝食を共にされた。

▼中島鐵州君(鳥取)は四月六日商用で上阪、多忙の中を川柳雜誌社を訪ねられ、久方振りで路郎師と歡談された。君は最近事業のため席のあたゝまる暇もなき由。

▼奥村丹路君(不朽洞會員)の令閨は三月二十三日に令嬢を喜ばれた。お祝ひ申上げる。

慶

轉居

▼妹尾八九滿君は大阪市東成區南生野町四ノ五二へ

正誤

▼三號二頁三段二行目青兒君の句ウギ〳〵はギウ〳〵

▼三號六頁二段七行目アート君の句窓軍は車窓

ルービヒサア
大日本麦酒株式會社

東京だより

銀座 鳥

公認選者右耶無耶

東京柳壇の公認選者は、四月の聲を聞いても、具體的の公表もなければ、句會の實際を見ても、柳友會を除いては實行されてゐない、そして妙なことには、選者認定委員會に關係を有つ、柳友會でも、川柳研究社でも、この問題に就いて今日に至るまで一言も誌上では觸れてゐない。結局は選者認定委員會といふものが、一般的にはつきりした言動をとらないからであるとみることが出來るが、正光氏がお先走つて、公認選者の名を活字にしたため、先生が公認されないで弟子が公認されれ、先輩と後輩の順が亂れたり、句會開催者(これは取りも直さず、選者認定委員)の御都合主義が暴露されて、物議を釀したであらうことは想像出來る。

それかあらぬかは知らないが、公認した選者への異議や、公認されない先輩の友情的割込運動だのと、認定委員會自身がごた〳〵してゐるから(このごた〳〵には、きやりと川柳研究の感情的對立も加はつてゐるといふことである)却々圓滿解決には至らないだらうといふ噂も、まことしやかに傳へられてゐる。

一狂氏の東上

四月一日のきやり句會は、神戸ふあうすと川柳社の大山一狂氏が出席したので、席題の選があつたのは當然であるが、宿題選者の要人氏も、席題選者の幻樹氏も公認選者ではない、この分だと、前項の噂も單なる噂でなさ相である「柳友會の公認選者さ」などといふ惡口がほんとうでなければいゝがと、末が案じられる。東京柳壇以外で公認選者を話題にしてゐるだけに、氣になつてならない。

一狂氏は勤め先の庭球大會應援がこんどの上京の目的であるが、きやりの句會へ間に合せたのは、五月中旬に催される「ふあうすと十周年記念大會」への東京からの出席勸誘の一役を持つて居たのであることは、一狂氏の挨拶で明かだつた。當夜一狂氏を圍む小宴が淺草の料亭に持たれたが、斯ういふ場合我等門外漢は、世話人からお鼻がかりがないので、一狂氏の句境に憧れを持つて一夕膝を交へたいと思つても、寄りつくことさへ出來ないのは情けないことである。

句會亂立の兆

きやりの分派とも云ふべき、作句研究會が二月から毎月句會を開催してゐるが、きやり社人の中村鐵兜氏の雷吟社が四月から句會を催すといふ、去年の春頃から姿を消した小句會が、草萠ゆる候をきつかけに、そろ〳〵芽を吹いて來るのではなからうか、さういへば大井の天馬吟社も句會を催してゐる。やがて又日割に困るほど句會が催されることになるのではないかと思はれる。求眞會だの、五人組だのといふ樣な酒食の會が出來るより、川柳のためにはよいかも知れないが、句會が興行的なやり方を續けてゐるうちは、大した効果はないだらう。

川柳・案内

懸賞川柳

課題「姑 娘」五月十日
「若 さ」六月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先 堺市出島町三五一番地
麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

大寸活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢(但し前金切手代用可)、改號、移轉、句會案內柳書廣告、その他

東海の代表誌 **川柳草薙**
一部一〇錢 一年一圓(郵税共)
名古屋市南區八熊町寺田
發行所 草薙川柳社

川柳きやり
菊判每號七十數頁
每月一日發行 一部廿五錢
東京豐島區高田本町二ノ一四六八 川柳きやり吟社

京
一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 **みちのく**
川柳
一部十五錢 一年一圓五十錢
青森縣黑石町 川柳みちのく社

川柳大陸
一部 二十錢 一ケ年 二圓
大連市淸見町一五一
川柳大陸社

春聯
一部 二十錢 一年 二圓税共
大連市薩摩町一六一ノ二三
森崎方
春聯川柳社

蟷螂
一部 十錢 半年 五十錢
大阪市旭區鴫野町三〇〇
蟷螂川柳社

近作柳樽

麻生路郎選

ローソクの灯で朱書したり殊勲甲　北支　月原宥明
輕機關敵も野草も薙ぎ倒し　同
人の世は移り變れり大黄河　同
裝甲車うしろはシャツがよく乾き　同
激戰をけろり忘れてシャツ洗ふ　同
我がものになつた城壁から旭　同
應援に向ふ砂塵と日の丸と　同

和田默然人氏を訪ねて

再會を固く誓へぬ此の身體　同
春日遲々苦力亂の手をやめず　張家口　小川靜觀堂
子は立派に育てますと寫眞抱き　同
藤十郎僞つたおぼえ更になし　同
おしろいの毒で淋しう死なはつた　同
凱旋のもう鋤鍬を振つてゐる　同
八ッ口の紅絹のぞかせて軸をかけ　同
支那人の誠か策か献金し　朝鮮　姜　弘龍
移民村産婆のぞかに馬で行き　同
ままごとのその儘にして追はれたる　同
兒童劇ほんとの兄を父と呼び　同
遠慮が度過ぎて相思を看破され　同
蓄音機の藥賣りかと兒は行かず　同
工場が建つて大阪伸びてゆく　大阪　富岡巨人
六錢の切符で憎い口をきく　同
長いものに卷かれぬ男職を替え　同
切花を提げた姿も處女らしく　同
抱いた子の指さす方へ歩くなり　同

驅逐艦夏潮進水式を詠む（五句）

ナッパ服おいらの腕にかけた艦　大阪　夷　一笑
船おろしことほぐ樣に飛ぶカモメ　同
肩車子供へ見せる驅逐艦　同
國歌吹奏靜かに巨體すべり出し　同
甲板に武裝の見えぬ船おろし　同
自信ある顏タイピスト脇見せず　名古屋　森田三錢
滿月を知らずネオンのこの人出　同
擧手されて星のふえたを自覺する　同
引眉毛落して親に逢ふ女工　同
子の世話は女中委せの銀狐　廣島縣竹原　梶川芳郎
裏切つた友を憎めぬ氣の弱さ　同
子の自慢父靖國に在ますなり　同
動は語らぬ大陸赫けの顏　同
春のエレベーター屋上へまつしぐら　長野縣須坂　高峯柳兒
歸還兵子に親しめぬ髭にされ　同
大陸へ適わぬあばら骨をなぜ　同
表情を變へ集金屋念を押し　同
軍服で挨拶されて改まる　大阪　淺野杢葉
二次回へ素顏が來たで興ざめる　同
結び目の解けぬ宵かな君をまつ　同
まだじやまにならぬ火鉢に春淋し　同
日の丸を馬にも立てゝ入城し　大阪　田中風葉
鯉幟我れは日本で生れたり　同
電柱の上に人居る立ち話　同
母母母父では金にならぬとさ　同
高架線二階位いを見て走り　大阪　山川富士
大阪の土になる氣の丁稚なり　同
野天風呂階級の無いほがらかさ　同
蓬餅里の話に觸れるなり　同
純喫茶なんと淋しい文字なるぞ　尼崎　八竹正柳
エレヴエーター動物並に扱はれ　同
まあ十人並とは何たる情無さ　同
バス嬢の乘る餘地がないラッシュアワー　同
未亡人同志利息で食ふ話　大阪　古寺謙南坊
臨時汽車さくらの驛で空になり　同
醉ふてからもう一廻り花の山　同
物凄い音を立てゝる支那手品　同
癒るとも慰問の花もさう言つた　愛媛縣大洲　上甲可洲
歡送迎兎角女に用多し　同
戰死なら未練を持たぬ女なり　同
一問一答すめば用なき新聞社　同
反省は妻に濟まない平社員　名古屋　稲垣正穗
標札屋愛の巢とまで氣がつかず　同
想ひ出の櫻へ妻子連れてくる　同
休操に分がついてゐる軍需工　同
翌る朝子供は出前見逃さず　大阪　西尾　栞
ハイキング何のこれしき河をとび　同
掌程の寺に着いたるハイキング　同
春の潮巖のくぼに溜るほど　大阪　山本葉光
母とする苦勞とほとき子と産れ　同
サービスに番台子守さゝれてゐ　同
寶石屋長期戰下によい景氣　大阪府高師濱　米本貴志子
舌先きで轉ばすやうに玉露飲み　同
寄附の禮村の歴々泊り込み　愛媛縣大洲　米澤曉明
歩合算小學校の本を出し　同
以下次號三十日の長い事　同
小使といふ名の方がよい幹事　同

乳母車だけでは乘れぬ子を脊負ひ　防府　國弘半休
面會の包守衛に睨まれる　同
萬歳をすれば飛びたつ屋根の鳩　下關　櫻川不水
プロペラが今日遠足の空で鳴り　同
人樣の金で吏員の手が細り　大阪　米谷松太樓
頑迷の父に明るい子が産れ　同
聞きわけのある子の素直いとしまれ　同
丹前で拂ひすました大晦日　廣島縣竹原　西野みづほ
日曜を犬つながれたまゝ暮れる　同
歡送歌自慢の聲がリードする　同
夢多き青春に背いた藥壜　大阪　福井いづむ
緣遠い姉三味線と淋しくゐる　同
雛祭椽側の陽は子らのもの　同
れんこ鯛大陸目指す膳になり　兵庫縣　北川春巢
女店員の流れ橋筋あなどれず　同
受驗地にある親類を思ひ出し　同
死亡廣告男爵の友があり　下關　多田市多樓
刈り立ての頭で債鬼やつて來る　同
七轉八起だるまに似た暮し　同

伊勢にて

神苑の砂利も尊いものに踏む　同

京部にて

京の街さて京美人は何處にゐる　同
灸の跡湯で訊かれたら話したり　名古屋　鈴木可香
うれしさへ涙が先になる女　同
風船の行方へしばし口を開け　同
風强く硝子をゆする留守居番　朝鮮　弘津慶一
この牛も賣られて行くかうなだれて　同
兵隊へゾロ〳〵ついて日本の子　同
妻の日記亭主の酒をもてあまし　大牟田　高田抱逸
腕時計脫衣の奥の奥に入れ　同
新參の席に茶瓶の手の遠し　同
父さんをかぼうに兄弟もめてゐる　尼崎　飯尾寄與史

選拔中等野球大會

ふかくボールいつそ風でも吹けば良し　同
蔣は部下を消耗品とみなしてゐ　長野縣上山田　佐二木千隈
國策にそふ女房の子澤山　同
ごみ〳〵と歴史の殼に住んでゐる　大阪　戸田孤逢
搾乳室ガランとタイル光つてる　同

戰地で拾ふ

落伍すなここは大別山の中　岡山　尼崎綠柳
髯ぼう〳〵笑つた怒つた目で見分け　大阪　津路紅多呂
天王寺香具師と乞食のかせぐとこ　同
つぼみから茶店が出來る嵐山　廣島縣竹原　黑本芳泉
後家立てる氣で三味線の弟子を取り　同
衣ずれへネクタイの位置確かめる　大阪　丸島利生
婦人科へ二人で禮にゆく若さ　同
入學が出來て嬉しい金がいり　今治　長野文庫
ブル街に門燈二つ三つ欲しい　同
親通りせず大學出店を閉ぢ　平壤　小島鰐洞
擧手の禮出來て見送る脊中の子　同
誘惑へ負けたを悔ひる此指輪　奈良縣郡田　嶋田翠峯
賞罰の無い平凡な履歴書く　同
集印帖次は海越ぇ山を越ぇ　廣島縣竹原　谷本朱雀
手踊りの櫓を槽ぐ眞似がやさしすぎ　同
土地柄をほめて荷を解く藥賣り　大阪　藤森小雅子
事務員はちよつと頼むと逢いに行き　同
窓口で頼む用事は後にされ　堺　野島神樂
母だけに知らす秘密が父に洩れ　同
罪科の深さへ神の愛の鞭　廣島　眞下麥作
藥仕事しながら父の日向ぼこ　同
下宿する茶碗にせめて僕の趣味　廣島　福岡葉留路
ハイヤーを駕に代ぇたい松並木　同
ゴム印にこき使はれた人生か　廣島　河合白外郎
春の草先祖の墓に遠慮せよ　同
歩いてゝニュースが聞ける軒並び　兵庫縣　增元甲陽
セパートもよいが女中も役がふぇ　同
ラッシュアワー娘はつまましうドアに立つ　廣島縣竹原　梶川辰子
辨當のうまさ働く幸を知り　大阪　堀毛一龜
釣籠の小錢いそがし客が混み　下關　木村比呂志
乳母車荷物も載せて子も乘せて　廣島　須田一葉
二人ツきりの母子へ今日も暮てゆき　廣島　近藤須彌浩
大事故で田舍の驛の名が知られ　廣島　竹中女郎花
生活なご觸れず傷士へ嫁ぐ意氣　廣島　奥富天作
献納へ毛布まとめて老夫婦　堺　野島夢女

各地柳壇

いのちある句を創れ

理整秋豆・郎路

投稿規清

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

本社三月例會（大阪）

三月十八日　於誓得寺

出席者（順不同）
紫香・かほる・潮花・一波・アート・孤蓬・萬的・杢葉・夕鐘・謙南坊・默平・八歩・双葉・村句茂・斗風・由布・夜王・光路・鐵水・八九滿・素人・アキラ・葭乃

兼題「れんこ鯛」　かほる選

誕生日時局知つてるれんこ鯛　村句茂
レンコ鯛一本呑んだ顔となり　靜波
れんこ鯛お酒呑んでる様な色　夜王
れんこ鯛拾錢まけて賣れるなり　巨人
ひざの子に骨とつてやるれんこ鯛　双葉
れんこ鯛並べられては綺麗すぎ　杢葉
れんこ鯛いゝ養子口聞かされる　八歩
れんこ鯛つゝいて幸福語り合ひ　由布
れんこ鯛子供片身を喰べのこし　双葉
子供へは本當の鯛と母の罪　杢葉
（秀）れんこ鯛の片身で妻は酒をつけ　潮花

席題「丸　太」　互選

空いてゐる借家の端へ丸太立て　紫香
大國旗揚げる丸太を皆で塗り　默平
金策はつかず丸太に腰かけて　八九滿
騷音の中に丸太を板にされ　双葉
五百年丸太になつて値がきまり　夕鐘
丸太の影作業着はばからない話　萬的
書き劇の丸太へ鹿の子泣き崩れ　孤蓬
無理して渡らいでもえゝがな丸太橋　素人
丸太の上から手傳ひ叱られる　夜王
水害の後か丸太はほつとかれ　由布
丸太けふ思案する日の水がひき　同
都々逸の機嫌丸太へけつまづき　村句茂
サーカスと知れる丸太を高ふ組み　同
復舊の丸太を渡る日章旗　同

席題「踊　り」　夕鐘選

見て貰ふ踊りであつて立ちそびれ　八九滿
總踊り春爛漫のアンコール　村句茂
磯節の踊りへ仲居二人ふえ　潮花
大陸の景色踊りの中へ入れ　かほる
踊る足ふと二月を感じたり　萬的
豆しぼりおしつけられて立上り　八九滿
且はんの踊りに合ふて糸が切れ　由布
醉ふて居ますのでと踊りうまひなり　八九滿
踊るよと四五杯飲んで立ち上り　杢葉
踊りからまつすぐに去ぬ子供づれ　かほる
不器用な子が一人居る總踊り　默平
宴會の膳こえて出るたこ踊り　潮花
（秀）子の踊りすんでつめたい茶ますり　萬的

兼題「ひな祭り」　葭乃選

母からの道具も交るひな祭り　紫香
二世三世つとめて祖母の雛があり　孤蓬
末つ娘と嫁が飾つたひな祭り　斗風
左大臣の鼻が欠けてるひな祭り　夕鐘
雛祭り母もうれしく飾りたて　潮花
ひな祭り今年は桃がおくれてゐ　光路
細卷をこさへて雛の客を待ち　紫香
末の子は菱餅ばかり取りたがり　杢葉
ひな祭り母子しみじみ灯に見入り　八歩
增築の部屋があかるい雛祭　斗風
腕白がいゝ子にされる雛祭　謙南坊
薄給を割いた掛圖のひな祭　双葉
（秀）ひな祭り報せた顔が皆揃ひ　かほる
（軸）どの皿もツキ出し程の雛の膳　葭乃
五人ばや富樫に似てるのも交じり　同

席題「麓」　默平選

女連れ麓で草履買はされる　村句茂
登山の娘麓に近くくたびれる　潮花
二合瓶麓の茶屋で追加する　村句茂
別れねばならぬ麓にたそがれる　八九滿
麓からもう辨當の事を云ふ　村句茂
麓にても一度地圖を出して見る　萬的
麓から見當つけて登つて來　光路
峠茶屋麓の宿を云ひ振らし　杢葉
麓から拜んでおくと母のいふ　同
晝辨當麓の方で呼んでゐる　光路
霞もう麓の小屋を包みかけ　潮花
水車ガタゴト麓近かづけり　双葉
（秀）麓まで降りると慾がふえるなり　八歩
（軸）切り取つた杖は麓で邪魔がられ　默平

席題「信　用」　八歩選

信用をさせてゆつくり靴をはき　八九滿
信用の裏書首をやると云ふ　村句茂
あの手この手夫信用されてゐる　光路
信用があつて居殘る用も出來　萬的
醉ふてから信用せよと强ひられる　杢葉
信用もない大阪で小さく生き　斗風
信用のある看板がすゝけてゐ　潮花
電話して信用させて飲んでゐる　夕鐘
きつちりと金を返して借る氣なり　同
（秀）信用があり借金がたまるなり　夜王

席題「雲　雀」　夜王選

揚雲雀新芽は靴にふまれてゐ　萬的
春うらら雲雀よ〳〵小そうなり　光路
舞ひおりる雲雀を見てる男の子　斗風
雲雀なく方へ帽子を少しあげ　紫香
降りてくる雲雀へ乳房手をはなし　八九滿
眞直ぐに雲雀鳴く道驛へ出る　双葉
（佳）頼もしき銃後の鍬へ雲雀鳴く　八歩
働いた腰を伸して雲雀きく　八九滿
巣立ちした雲雀大空晴れ渡り　謙南坊
（秀）田舍はいゝなあーと雲雀見てゐる　夕鐘
（軸）麥踏みにもう馴れ切つてゐる雲雀　夜王

梅田支部句會（大阪）

水谷鮎美報

雜川

門　前

門前に號外が散る冬の風　由布
門前で襟を正して入るなり　秀峰
門前の焚火へ親しさますばかり　斗風
門前は今職工の引けるとこ　靜波
門前のそこから續く夜店の灯　同
門前は更けゆくまゝの月あかり　鮎美
門前の茶店の梅はまだ蕾　同
門前で待つ身へ冬の月が冴へ　翠陽
門前の女中飛行機ながめてる　同
門前で尾をふつてくる犬を呼び　鮎美
空車ある門前のよい日向　同
門前の易者に運を見て貰ひ　かほる

今治支部句會（今治）

於心府居　長野文庫報

雜川

朝、髭、隣、庭、消息

朝々々希望に燃えて初出勤　明童
外へ出て齒を磨く朝よい天氣　歌調
朝霧の中に上陸成功し　文庫
いゝ天氣朝の鏡へ笑ろて見る　心府
宿の手摺に海からの朝　曉童
良い髭ではぎの五匁買ふて去に　同
床屋さん剃つては髭を腕につけ　清
獨身の髭をいぢつて夜が更ける　歌調
隣から今日ボーナスを匂はせる　曉童
名前丈け知つてる隣の石の門　文庫
庭の木に繡眼子が來てるうらゝかさ　心府
椅子などを庭へ持ち出す恢復期　文庫
消息を得意先から聞いて來る　心府
消息を絶つた頃から儲けだし　曉童
消息に髭の長さが書いてあり　八木
消息があれきり絶えた軍事便　向上庵

川雜　大鐵局支部創立滿六年。北大阪、港支部創立一周年

紀念合同句會（大阪）

一月十四日　於大鐵倶樂部　正本水客報

鐵、水引、境内、思案、素肌、花嫁、板の間、聞合せ、足相撲、洗粉

金持ちの家らし鐵の柵長し　幸路
父の死に會へず鐵粉あびる夜　鮎美
鐵の音都會は急ぐ用ばかり　二南
父と子の槌へ焔のなかの鐵　鮎美
鐵を打つ音だ銃後も闘へり　風葉
鐵兜貸してやつたに泣かされる　松太樓
夜警の觸れた鐵の冷たさ　某人
默々と鐵は倉庫で錆びてゐる　豆秋
鐵が錆びたと同樣に扱はれ　路郎
水引をかけつゝ應對の辭を敎へ　秋志
水引を押へ祝の字が歪み　白面人
水引の下へ親子の名を並べ　潮花
水引の金が手に附く目出度い日　某人
水引の型が出來てる包紙　紫香
新しい水引にして持つて行き　稔幸
水引へふと思ひ出す事があり　風葉
頼まれて書く水引の位置がよし　二南
水引のつりは其儘置いとかれ　かほる
夜ぎりの深さ境内の鈴が鳴り　斗風
境内の雪元老を困らせる　染史
フエルトの裏境内を意識する　潮花
召集令配布境内通り抜け　某人
思案する妓へ今日の灯がともり　斗風
思案する火鉢きれいな灰にされ　風葉
思案まだつかず置き酌ぎされるなり　某人
娘の思案親の思案と又別に　潮花
屏風越し素肌になつたらしい音　豆秋
注射まだ素肌へ上衣着て並び　苦樂公
寫眞屋の手が花嫁の顎へ來る　同
花嫁の鏡に母がゐてくれる　二南
板の間へ蜜柑は箱のまゝ置かれ　某人
聞合せ歸りを辻で迷ひかけ　同
聞合せ丁稚の淡い戀心　孤蓬
聞合せ椿の花を踏んで去に　水客
粉雪が鼻でとけてる聞合せ　鮎美
足相撲どてらの二人とも轉び　苦樂公
足相撲宿の浴衣がしわになり　風葉
足相撲十一文の足袋を脫ぎ　豆秋
洗粉をくわへてくゞる湯屋のれん　柳太
洗粉も持ち城崎へお供する　豆秋
洗粉の袋を妻の留守に嗅ぎ　白面人
洗粉がコッポリ浮いた寒の水　青兒

川雜

廣島支部句會（廣島）

濱田久米雄報

二月二十四日　於　廣鐵倶樂部

乳母車、失言、無心、模樣、線、双葉集

庭の隅無き子を偲ぶ乳母車　延象
乳母車娘の樣な母が押し　良句天
弟のものになつてる乳母車　日昨日
乳母車人形持つて乘ると云ひ　廣子
日向ぼこ人形と寢た乳母車　一葉
乳母車あはれ屑屋が踏んぢまひ　天作
乳母車氏神樣へ押して行き　樂人
花の散る下で休んだ乳母車　不水
乳母車双兒は町の人氣者　周二
内職を積む乳母車子を脊負ひ　清登詩
乳母車生活などに觸れず買　市多樓
乳母車時雨へ母の脊を濡らし　紫浪
愛國の歌も明るい乳母車　彌山
乳母車いつもと違ふ景色へ出　久米雄
失言を元へに直す朗かさ　ひろし
失言にラヂオ何度も云ひ直し　延象
失言を本當にされて靑くなり　三平
失言を知つてる子供笑ひ出し　草雲子
お目出度く出來て失言無事にすみ　千代香
雄辯家すら〳〵過ぎて失言し　不水
失言へ赤い鹿の子がむきになり　九呂平
失言をあつさり認め休憩し　天作
失言が愛嬌となる座談會　白外郎
つい口が辷つて醉ふた振りを見せ　市多樓
失言を取消す初年兵の擧手　征野
失言が出そうに酒の座がはずみ　久米雄
失言を男の意地が取消さず　秋史
無心かと親爺一言云つたゞけ　良句天
今日も亦無心に歸る日曜日　天國
無心狀子供の事も書き加へ　麥作
酒の味覺えたらしく無心殖え　伯峯
又無心かいと老眼鏡を拭き　秋史
年頃になつて模樣へ目を注ぎ　伯峯
模樣替へ八起きの腹がある店主　久米雄
花模樣大きく搖れる舞稽古　須彌浩
裾模樣今日は見合の歩きやう　麥作
猿廻し此處まで寄れと線を引き　銀鞍
眉墨の線に氣立てがうかゞはれ　麥作
大陸へ直線をとる航空路　白外郎

双葉集（第六號）

いなゝきを快く聞く秋の空　至岩
秋風が吹いてネオンの灯が寂し　康津奈
凱旋に戰地をしのぶ服の色　天國
藥湯へリンゴを剝いてくれる母　白外郎
振り向けば秋の氣配の中に聲　久米雄

川雜北大阪・港兩支部合同

出征柳友慰問句會（大阪）

二月十八日　於大鐵倶樂部　野本呑水報

鐵かぶと、日の丸、慰問文、蔭膳、節句

電柱、玉子酒、男手

鐵かぶと今朝凱旋の霧へ立ち　明子
風呂屋まで子は鐵かぶとかむつて來　美鳥
鐵かぶと拵へてゐて丙種なり　呑水
鐵かぶと眼もかくれてる初年兵　進
鐵かぶと重さを知らぬ丙種なり　一笑
日の丸の歌を唄つて子等かへり　綠水
簡單に日の丸を書く男の子　紫香
日の丸は後へは引かぬ旗に出來　呑水
慰問文の朗讀ラヂオに泣かされる　波矢子
慰問文豐作の穗が添へてあり　風葉
慰問文返事は無事な寫眞なり　染史
慰問文兵隊さんと先に書き　水客
蔭膳についだビールの泡が消え　松徑
蔭膳へよち〳〵歩く子が坐り　一笑
もうよからうと父蔭膳へ箸をつけ　マサ乃
蔭膳へ靜かな春の陽があたり　紫香
蔭膳の前でいゝ顏させるなり　萬的
蔭膳へ少しやつれた母の顏　幸路
蔭膳に祖母は靜かに座るなり　紅多呂
蔭膳へふと雛壇の桃がちり　潮花
蔭膳へ無事を祈つ女母の影　マサ乃
蔭膳へ子供は蠅をよせつけず　萬的
金屏風白酒を注ぐ手が映つり　水客
玉子酒宿の布團がみじかすぎ　潮花

川雜

塗青支部句會（大阪）

二月二十日　於　染料會館　淺謙公報

階段、初午、夢

夫婦喧嘩へ段の下から耳を立て　河井
階段を子は眞先きにかけ上り　謙公
寢に上るらしい隣りの梯子段　光路
初午の太鼓と太鼓とにらみあひ　中谷
狐ずしで子は初午の腹が出來　光路
初午の太鼓は太鼓、奥は呑み　同
初午の太鼓鈍つて雨になり　謙公
夢の樣な話ですと骨を抱き　月草
つまらない夢を氣にする四十過ぎ　子元
惡い夢さめた動悸がまだやまず　牛角
儲かつた夢を鼠に起される　子元
何事も夢だと猪口を取り直し　謙公

川雜

下關支部句會（下關）

二月七日　於　多田市多樓居　多田市多樓報

松の内、火鉢、素人、笑顏、娘

日の丸の旗新らしう松の内　一角
松の内人名錄を書き直し　半休
松の内世話女房のようでなし　市多樓
碁敵を酒に取られた松の内　秋史
松の内年を重ねた辭で來る　山尾
書初も祝戰捷と松の内　九二夫
珍客に先づ〳〵〳〵と火鉢が出　イロハ
纏まらぬ話火鉢の火は消えて　泰山
打ち解けて火鉢の炭を取りに立ち　二堂
火鉢抱いて心傷あり　不水
火鉢から炊事の妻へ世辭を云ひ　同
爆笑の火鉢カンピン乘つて居り　千秋
氣持だけ且那を氣取り長火鉢　哲志
戰線を思ひ火鉢の火をいける　代志久
火鉢もう小さくなつた子澤山　國繁
待つてゐる火鉢の餅はふくれてき　公樓
贅澤な火鉢の溫み乏し過ぎ　愚連坊
ミルク溶く火鉢に春の陽が映える　不水

桐火鉢隠居らしい智慧をかし　市多樓
素人の作とは云へぬ味があり　殘月
失敗は素人と云ひそれですみ　一柳
素人には兎角派手なと母は云ふ　きくの
失策は結局素人にされてゐる　九二夫
素人の儘に頭が禿げてゆき　九呂平
むつとして歸れば妻の笑顔あり　新一茶
採用の通知笑顔で母に見せ　川平
初孫の笑顔に家中集ひ寄る　比呂志
耳隠し娘同志にひやかされ　苦笑
緣談を母にまかせて猫をなで　篤
拗ねて居る娘障子の蔭に立ち　市多樓
濟生へメガホン持つた娘は立てり　九呂平

雜川　蒙疆支部句會（張家口）

一月二十九日（第四回）　於　柳路居

風呂、姑娘　岩崎柳路報

仕舞風呂我が體息に眠くなる　清水
湯疲れが部屋一ぱいに膝枕　靜觀堂
貰い風呂裏から小さう入つて來　松代
若き三助に惱ましき日もあらん　柳路
昨日見た姑娘今日は厚化粧　史人
默々と姑娘驢馬で何所へ行く　福柳
便り待つ姑娘へ來た橇の鈴　福壽草
姑娘の脱いで置いたか赤い靴　幽鳳
姑娘の手にしほれてる菠薐草　同
姑娘の線が嬉しい支那芝居　桃水
姑娘の這入つて高い煉瓦塀　北扇
着飾るだけに姑娘は奥に住み　同
道狹まくなる姑娘に星が降り　清水
姑娘の小麥の肌へ陽の光　靜觀堂
皇軍入城姑娘も旗を振り　同
點景に姑娘も居て春めく日　漫蹣郎
歩調廣く姑娘四溫の日を歩き　同
姑娘のもう打ちとけた膝を組み　松代
纏足の姑娘へ強い向い風　柳路
姑娘のお供へお供ついて行き　同

二月五日（第五回）

女優、駱駝、馬鹿

純情の女優と云はれ痩せて居り　新明
北風に女優慰問の旅を行く　桃水
久米八に舞台の蘆が寒く鳴り　清水
伊達卷の女優であつて其れで春　漫蹣郎
いゝ年で女優のサイン持ち廻り　靜觀堂
僞りの舞台に老けて居る女優　松代
久し振り女優我が家で猫を抱き　柳路
うらぶれの駱駝野を行く姿なり　桃水
城壁に影長々と行く駱駝　同
砂丘遙か駱駝は月の中にあり　清水
諦らめる樣に駱駝は眼をつむり　漫蹣郎
唄朗ら匪影なき日の駱駝隊　靜觀堂
立ち上り駱駝はやをら顎を出し　福壽草
幸福は馬鹿で一生終る事　桃水
金があり馬鹿を承知で嫁にやり　清水
馬鹿騒ぎする淋しさを知つて居り　漫蹣郎
鶏に馬鹿な子供と住み馴れて　靜觀堂
馬鹿になつてお邸で年をとり　松代
馬鹿といふ男であつて儲けて居　柳路
馬鹿にした樣にロッパの眼鏡越し　同

阪大川柳會三月例會

三月廿五日　於　阪大惠濟會館　丸島利生報

人生、ワイシャツ、双生兒

かばかりの金で人生すりへらし　栞
絹夜具で情死するのも人生さ　利生
人生五十これからといふ二號おき　芳一
使はれて〳〵人生ザ、エンド　利生
人生をこわごわ送る金を持ち　芳一
人生の總決算赤字だけ殘り　利生
人生がどうのこうのと二階借　柳秀
餘生など云ふも恥かし五十年　方正
人生の話でもめるバアーの隅　柳秀
肯腸の手術後人生觀變る　春巣
べんちやらの利く人生を淋しがり　同
人生意氣に感じて今日の彼　筑川
結界の中で人生鑒が立ち　栞
お辭儀ばかりして人生考へず　春巣
悠々と停年制へゴールイン　たけを
よれ〳〵のワイシャツうどん喰つてゐる　方正
ワイシャツの袖をまくつた宣傳部　栞
酔ふてきてワイシャツだけの花の下　方正
おとりつぎワイシャツさんと仲居云ふ　柳秀
ワイシャツが四條河原の灯に動き　同
ワイシャツの腕をまくつて玉に負け　春巣
素晴しいワイシャツ上衣ぬぎたがり　同
ワイシャツも疲れ切つてる旅の宿　同
國の父古ワイシャツをくれと云ふ　同
ワイシャツの袴は毛唐のものに出來　柳秀
ワイシャツのネル地悲しい五十過　利生
ワイシャツを着かへることで妻ともめ　栞
戀人に間違はれてる双生兒　利生
成功の双兒雜誌の記事となり　同
双子だともう近所では知つてゐる　春巣
双子とは知らず微兵官慌て　同
双子とは云はず産婆は帶をしめ　柳秀
其の當座母だけが知る姉妹　正甫
寫眞では見分けがつかぬ双生兒　利生
出世した双子の一人鍬をとり　栞

有恒倶樂部
松坂倶樂部

合同川柳會

一月二十二日　於　有恒倶樂部

エスカレーター、上京、私用、都會人、神樣

エスカレーター友達に逢つて逆戻り　平三
エスカレーター逆さに走るいたづら兒　三華
子供もうエスカレーターの上に立ち　耕二
お辭儀丈け大きいエスカレーター嫌　孤篷
あわたゞしい世界よ段梯子動いてる　雨月
エスカレーター母は見詰めやつと乘り　波夢造
エスカレーター壽司の賣場の奥が見え　生々庵
エスカレーターさて〳〵無性な世の中を　美根子
滿員のエスカレーターまつて乘り　しげる
エスカレーター初めて妻の着物を見　同
エスカレーター中の仕掛が氣にかゝり　德二
ノッポもチビも割に目立たぬエスカレーター　同
中程でエスカレーターは振返り　白面人
すりぬけてエスカレーターの前に立ち　同
おじんばはエスカレーター讓り合ひ　耕二
エスカレーター包み手摺に乘せて立ち　同
繁昌をエスカレーター見て上り　朴堂
暇な日をエスカレーター動くだけ　同
間違つたエスカレーター駈け降る　同
裏ばかりエスカレーター見て上り　同
上京の話は親の氣に入らず　しげる
リーグ戰あつて上京二日のび　同
歌舞伎座と銀座上京用が濟み　耕二
上京の歸り熱海と決めて發ち　同
上京は何か樂しいものにされ　耕二
上京の首を出させた寫眞班　白面人
この次は飛行機で行く東京市　同
上京の行きも歸りも見えぬ富士　同
上京の父が質屋のけりをつけ　美根子
上京の車中家出の譯を聞き　三華
料理屋の書出し私用の部に入らず　平三
會社へ行く朝もこんなに起きるのよ　孤篷
出張地私用を先にすませて居　しげる
私用でをくれた譯は財布が言ひ　三華
先輩は私用を公用にする術を知り　德二
社長室私用の客が巾をきゝ　耕二
私用だよと大臣下阪へとぼけて居　雨月
公用の日當で私用の無沙汰詫び　生々庵
午餐會濟めば私用の車也　銳々
肝心な話私用の方にあり　同
この次ぎは私用で來たい好い眺め　朴堂
警官の私用氣輕な國なまり　同
羨望の的は私用を聞いて來た　白面人
茶屋遊び決して私用の中でなし　美根子
お茶とニュース覺え都會の人となり　德二
薄暗い露路の奥でも都會人　三笑
幌馬車のスローはしやぐ都會人　三華
無慘なり只々都會人となり　しげる
もう三年になりますます都會人　同
シグナルの青まで待てぬ都會人　白面人
ウインドの型を着て來る都會人　同
ビュイックだねなどゝ通がる都會人　耕二
三日程は山に住みたい都會人　同
少々は覺悟で濡れる都會人　波夢造
野良仕事笑ふも街の人らしく　同
挨拶は目顔で濟ます都會人　同
都會人土龍の如く地下に入る　平三
都會人出口に近く席を占め　同
都會人雨が降るのに草履ばき　同
都會人生活生活生活と靴が鳴る　生々庵
ゴルフ場畫は都會の風が吹き　銳々
瞬間に泣いて笑つた都會人　孤篷
都會人あんな石まで持歸り　銳々
颯爽として都會人胃酸過多　生々庵

ビルの鍵アパートの鍵更けにけり　路郎
椅子でする碁へ悪友の電話也　同
神棚の煤フラフラと下つてる　波夢造
月詣で歸りの京を樂しみに　德二
神樣に頼つてばかりゐて不幸　朴堂
神樣に非ず双葉も土がつき　耕二
神樣も佛も知らず苦を知らず　雨月
神樣の多い電鐵儲けてゐ　孤篷
神樣と共に戰地に乘り込んで　三笑
神樣の氣焔が淋し留置場　白面人
神樣をまた取替えて無理を言ひ　同
神々の話で歴史いやになり　同
傳說で神のいさかひ聞かされる　同
神樣もほど〳〵になされませこの人出　生々庵
神話をば理詰めにきいてくる次男　孤篷
柏手に鶯少し遠ざかり　鋭々
神樣へ嘘も少々申し上げ　路郎
神樣を片手で拜む急な用　同
アパートを目指し境内はすに抜け　同

有恒川柳會（大阪）

三月十四日　於　有恒倶樂部

旅、鏡、相撲

マア〳〵と嬉しく旅程變へさゝれ　波夢造
いとしきは小學生に旅の雨　同
話では至極眞面目な旅なりし　同
支那へ行つた筈の作者に山で逢ひ　德二
東京行故郷に背いた人も乘り　鋭々
一泊の旅に藥品揃ひ過ぎ　同
風景を見ず出張の日が暮れる　同
旅愁とや船の汽笛を聞いて寢る　同
長逗留たゞ湯に入り膳につき　同
春の旅土產買つたり貰つたり　石橋
旅の恥ワイフに知れてもてあまし　羅漢
雨も降る朝の枕よ一人旅　三笑
旅日記ローマンスだけ書きもらし　平三
旅に出て案外すなほに過すなり　三樂
三日居て土產を買ふに忙しい　至藝瑠
エレベーターの中でも鏡の前に立ち　波夢造
中の好さ鏡の中の頬をつき　同
顏振つて鏡の疵に安心し　德二
疲れたるドレス鏡も振向かず　鋭々
恐ろしき心を鏡知るごとし　同
鏡台へ花挿してあり春だなあ　同
つく〳〵と鏡見てゐる二日酔　石橋
鏡見ろそれでお前は氣取るのか　羅漢
新學士鏡も一つ買求め　三樂
土つかず今日は此の手で勝つときめ　三笑
前夜からのファン中入後寢てしまひ　錦浦
ほろ酔ひの妓腕相撲すると言ふ　波夢造
負けたのも何か貰つた花相撲　同
相撲見てかへりに車掌小さく見え　羅漢
無雜作に投げた相撲に工夫あり　鋭々

三月二十八日

二人きり、借家、三味線

二人きり歩いた道よ二十年　波夢造
二人きりさて話さへ無い夫婦　同
靖國へ詣つる母子二人きり　平三
二人きり一人ぼつちに羨やまれ　同
二人きり隣の部屋は何しよる　錦浦
酔つたのが結局二人きりにされ　至藝瑠
花見には淋しう見えた二人きり　同
獨り待つ顏二人きりになつた顏　德二
二人きりになりたしなればてれくさし　鋭々
二人きり星座の名から口を切り　同
ふたありに鐵瓶が鳴り雪が降り　同
二人行く海岸の砂まだ續き　同
新建の借家石炭殼の道　波夢造
家賃は言はず借家を汚ながら　同
ボーナスで借家を建てる氣の弱り　同
二男まで借家住ひの時に出來　平三
新建は貸家札貼るひまもなし　錦浦
新築を次ぎ〳〵あさる借家趣味　羅漢
借家人二階ずまひは下目に見　同
絶好の借家に多がやつてくる　至藝瑠
の香のぬけた借家に風が入り　同
寄附だけは借家であると言ひたそう　同
まだ借らぬ家に机の位置をきめ　鋭々
その借家別扱ひで博士住み　同
學校へ行けば級長借家の子　德二
第二夫人借家もいつた家に古り　同
書割の樣な薄暮の借家街　德二
結局は妓がうたふ三味となり　至藝瑠
寢入り端口三味線が歸つて來　同
女房といさかひのもと歌と三味　德二
お唄ひ辛うなど〻言はれて嬉しがり　同
正念場三味の音止んで遠吠えす　平三
大騒ぎ太三味線の流行歌　波夢造
温泉の街の午後三味線の間も延びて　同
三味の音を聞けば息子は落ちつかず　錦浦
憂鬱で彈く爪彈を意氣がられ　鋭々
口三味へネオンの色が又變り　路郎
太を彈くその健康をみつめられ　同

松坂倶樂部句會（大阪）

戸田孤篷報

コンビ、布團、男親、長生き

献金に書いたコンビの名の太さ　尙志
輕業師コンビあぶなし綱の上　美根子
名コンビといはれた二人長屋に居　孤篷
ゴシップが夫婦にしてる名コンビ　同
朗らかなコンビ舞台の上だけよ　白面人
またあれかなど〻コンビが鼻につき　同
名コンビ痩せた相手がよく喋舌べり　三華
警察で叱られてゐる名コンビ　同
名コンビ家では強きパパになり　尙志
わら布團かり寢の夢は祖國まで　同
新調の布團の上にのびて見る　三華
座布團も遠慮勝なは無心なり　同
綿が切れるとしかりながらも針仕事　美根子
父によく似た子の眠るだきふとん　同
旅の友に早立ちの布團めくられる　孤篷
日曜はふとんもたたむ夫です　同
暖房のベットへ輕い掛ふとん　くもを
蒲團から見よ東海をうたひ出し　同
着物からふとんになつた子澤山　同
寢亂れてみたしふとんの派手やかさ　同
よい布團だけは眼につく樣に干し　白面人
トラックは布團を積むと動き出し　同
歸還してやはり布團はありがたし　同
先生の分は運つた夜具を敷き　同
藁布團永くはないと云ふ噂　同
羽布團値札見つめただけのこと　孤篷
父になつて父の氣持がわかりかけ　同
ちゝくまでもう見へたかと男親　三華
吾子をば相手に角力負けてやり　尙志
男親よし〳〵〳〵と子を立かし　同
男親飲まぬ息子と氣が合はず　白面人
男親動物園へつれてゆき　同
ドテラ着て理屈言つてる男親　くもを
ピアノ解らぬ親父だけにピアノ買へ　同
男親と娘二號と同い年　同
長生がしたいと最後言ひのこし　同
守らない長壽の秘訣聞いて見る　尙志
人間の壽命地球を打診する　同
長生きに聞けば昔の方がよい　孤篷
天盃へどれが孫やら曾孫やら　白面人
　　路郎

出產、鎖、椅子

生れる子の事もたのんで應召し　三華
鼻のひくい事も血筋は爭へず　白面人
悪いとこばかり親父に似て生れ　同
產聲に一家の春がやつて來た　美根子
出產の電話はずんだ聲でかけ　同
地に滿てる子等燦然たり大日本　孤篷
母と子のつながり丈は確かなり　同
振子振子坐つたまゝで父となる　同
出產の屆字劃が氣にかゝり　同
ヒスの手に引きちぎられた金鎖　美根子
金鎖つまぐるとよい智慧が出て　尙志
金鎖すぐに目方をきゝたがり　白面人
防共の鎖世界を締めて立ち　三華
朝禮の風校長の銀鎖　孤篷
人間の世界象にも要る鎖　同
鎖まきつけてキヤン〳〵と啼く犬でした　同
あの椅子が玉體のせた紀念館　尙志
子の椅子にうれしうかける懇談會　美根子
失望の身體を重くかける椅子　同
いゝたまへいはいでかと椅子引寄せる　同
試驗場母は椅子にもかけて見る　孤篷
同伴席男がひとり迷ひ込み　同
待望の椅子俺も今日から課長さん　白面人
元老は椅子のまゝ乘るエレベーター　三華
三等客見るより椅子をさがしてる　同
警察の椅子こんなにもつめたいか　同
補助椅子も滿員ですとことはられ　同
双方が椅子ひきよせた儲け口　白面人
宴會が三つ待つてる廻り椅子　同
トラックで椅子がとゞいた野外宴　同
巡査だけ椅子にかけてる說諭なり　同

社關係の人々（いろは順）

主幹　麻生路郎

顧問　長崎柳秀　長岡牛太郎　長野晴作　藤村濱　藤本卯之助　田中辰二　嘉納笠原路生　片岡直方　岡本一平　大道弘雄　長谷川一徹　池澤樂居

賛助員　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　生方敏郎　川村花菱　川上三太郎　亀井晟修　小川大西長三郎　森小林不漠人　東魚　橋本緑雨　不朽洞會員　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸里　永田里十九樂　末弘巖太郎　浅田一　鳥尾亮雄　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田雀郎　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　藤里好古　姪子省二　妹尾八九滿　大西豆八秋　須崎元紀太　春歩　吉田水食車　市塚没子　村姫松夢　水田谷鮎鐘　北山悟郎　鄭　★　寺井鋭々　奥村丹路　岩崎柳路　宮岡藤白峰　後藤いわを　西宵　松下小柳子　石曽根民郎　中西おさむ　原史トフ　加藤ライト　鳥生弗　正本古客　黒尾川潮紫水　丸坂形双虎　大橋谷水　岩崎本某　岩田中松　岡野代人　田崎平雨　佐中平　藤橋　岡本波夢　至藝瑠　翠陽布　増澄元　田井斗　酒由風　天野ト

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
函館支部（函館市）　亀井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
籔川支部（島根縣）　尼絲之助
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　酒井大樓
天王寺支部（大阪市）　妹尾八九滿
鶴町支部（大阪市）　岩橋双虎
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）　正本水客
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
今里支部（大阪市）　市塚没食子
今治支部（今治市）　長野文庫
光笑會（大阪市）　永田里十九
竹原支部（廣島縣）　黒本芳泉
十三支部（大阪市）　浅野牧人
嘉義支部（臺灣）　宮内耕期
兵庫支部（神戸市）　三崎陽幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水車
北大阪支部（豐中市）　黒川紫香
港支部（大阪市）　野本呑水
下關支部（下關市）　多田市多樓
北鮮支部（清津府）　三鴨美笑
蒙彊支部（張家口）　岩崎柳路

記後

★★★★★★★★

▼櫻が咲いた櫻が咲いたとて私はいふ櫻が咲いたとて、あけても暮れても私は川柳に沒頭してゐる。句會に―そして編輯に。

▼戰線の柳友はみんな元氣で、寸暇さへあれば作句に精進されてゐる。うれしい極みだ。

▼本號は特に發行日を早めたいと思つてすべてを早く締切り、連載物すらオミットして編輯した。雜筆で次號廻しとなつた方方の御寛恕を乞ふ。

▼オミットする筈になつてゐた映畫面も編輯間際に「とらんぷ譚」の試寫があつたので、亞鈍、形水、白面人、弧蓬、アートと僕の六人で作句し、俄に組み込むことにした。

▼半歳に亘つた拙文「北支蒙疆の印象」も本號で一ト先づ打切ることにした。御愛讀下さつた方々に感謝する。

▼三月二十五日に尾道で西日本鐵道川柳大會があつたので某人水客君等と出かけた。尾道は僕の故郷であり、四十幾年振りに墓參した。こどもの頃の記憶を辿つて福禪寺の墓地に足を踏み入れた私は感慨無量だつた。

▼雜誓の多い玉出の宅は私の執筆をなやまし、愚息のヴァイオリンの勉强をさまたげることが尠なくなかつた。それで萬障を排して南海本線の湊遊園地に居を移すことにした。從つて箇人宛の郵書に限り左記へお願ひしたい。

堺市出島町三五一番地

書け一奇に　全国便箋

募集

第十六卷　第五號課題
四月十五日締切
（十句以内）
刀　前田五健選
紳士　岡田某人選

第十六卷　第六號課題
五月十五日締切
（十句以内）
半ズボン　西田艸樂選
馬　石曾根民郎選

毎號募集
近作柳樽（雜吟　月切）　麻生路郎選
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
▲「川柳塔」への投句は川柳人協會役員及不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價
一部　金三十錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料
本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十四年四月一〇日印刷
昭和十四年四月十五日發行
第十六卷　第四號
（毎月一回十五日發行）
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
本社　川柳雜誌社
電話土佐堀（三三三三番）（八一六三番）
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

賣捌書店
（大阪）　參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店
玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
昭和十四年四月十日印刷納本　昭和十四年四月十五日發行

川柳雑誌

No・183

定價金30錢　送料壹錢

清酒
白鶴

喜多八で
喰つて兜の
味を知り
仁兵衛

味珍
兜鍋

北
さくら橋
とんかつ
喜多八

あ産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して雖病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町　和田卯助商店

産婦人科學博士述
「安産のために」冊子呈上

樹林醫學博士　推奨
片瀬醫學博士　監査

菊正宗

株式會社　本嘉納商店